

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

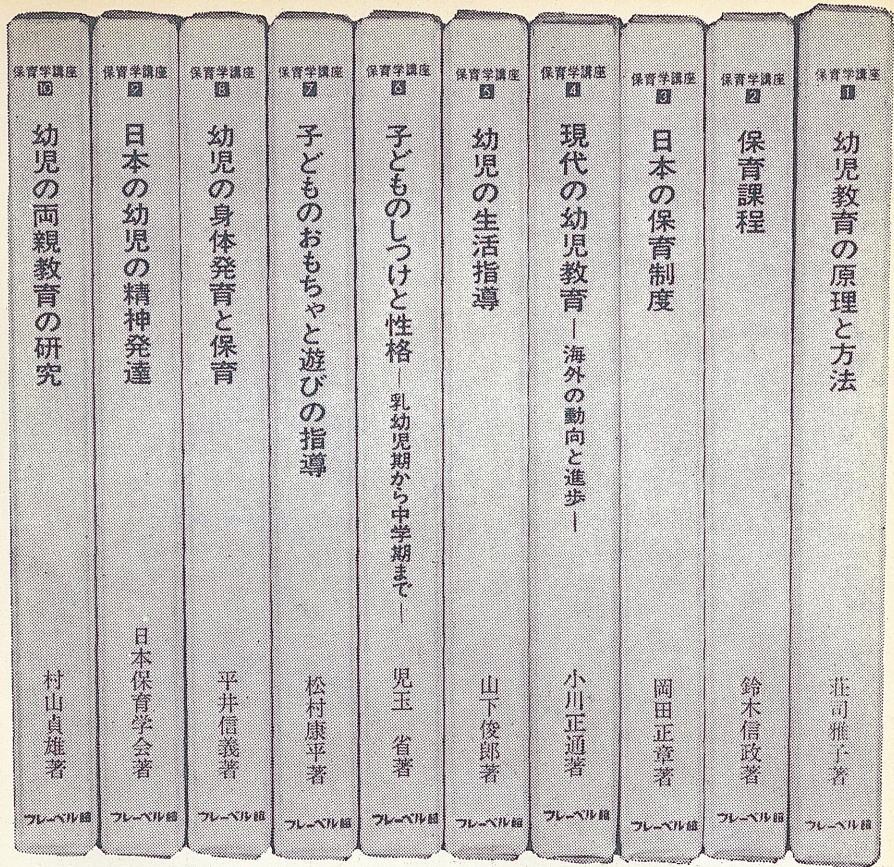
第七十卷 第一号

46. 2. 3



1

日本幼稚園協会



保育の原点をさぐる全10巻!!

保育学に科学的な基礎づけを加えたこの全集は、読みやすい文体と正確な資料をもって高い評価を受けております。保育の場での疑問や悩みを解くためにも、研究・調査のためにも、必読書としておすすめいたします。

A 5判・上製本・ケースつき

定価・各巻 1200円

日本保育学会監修

日本保育学会発足20周年記念出版

保育学講座 全10巻

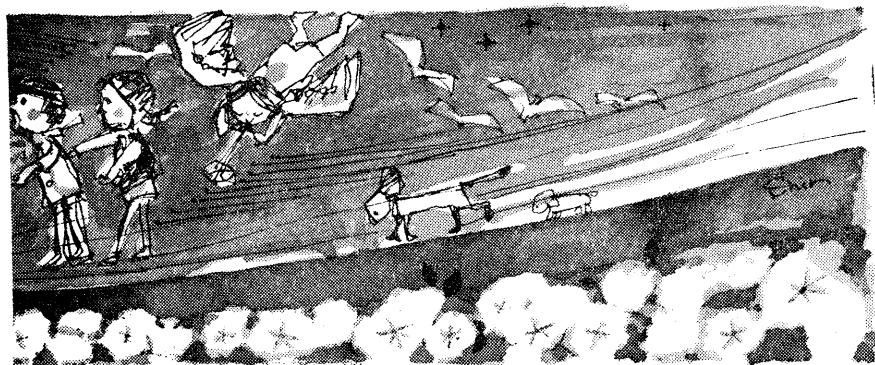
もよりの代理店・支社・支店・出張所にご用命ください。発行 株式会社 **フレベル館**

83749

幼児の教育

第七十卷 第一号





幼児の教育 目次

第七十卷 一月号

表紙 小野木 学
カッタ 斎藤 信也

★新春対談

子どものよろこび——昔の子ども今の子ども……………霜田静志・周郷 博…(4)

一九七一年の幼稚園教育を考える……………山村 喜よ…(10)

幼稚園の適正人数……………南 信子…(14)

初等・中等教育の改革に関する基本的構想試案をめぐって…海 卓子…(18)

幼児教育の課題……………津 守真…(24)

★かたらい——お茶の水幼稚園・園長室より……………(28)



遊べない子と現代の幼稚園

(1) 楽しい野外活動……

有木昭久……(30)

手先の動きと子どもの感情⑧……

清水エミ子……(40)

ヨーロッパの旅⑨……

平井信義……(48)

ちえおくれの幼児と幼稚園……

横木スマ子……(53)

★ユートピア——保育雑評……

守永英子……(62)

人——フランスス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界(1)……

秋山達子……(64)

★こんな本・あんな本……

鈴木直美……(70)

編集委員 周郷博・守永英子

本田和子・鈴木直美

編集主任 津守真・寺井直子



子どものよろこび

— 昔の子ども ◆ 今の子ども —

霜 田 静 志

(井 荻 児 童 研 究 所 長)
(ニ イ ル 研 究 家)

周 郷 博

(お 茶 の 水 女 子 大 学 教 授)
(同 附 属 幼 稚 園 長)

◆ はじめに

周郷 きょうは霜田先生と、子どものこと教育のことなど、いろいろお話ししてみようというわけです。日本がはじめて戦争に敗けて二十五年経った。その間にずい分日本は変わってしまいましたのでね。あまり日本は変わってしまっただ、何だか道に迷っている感じがある。

八十歳の誕生日をもうすまされた先生から、小さい子どもだったころのことなど思い出していただいて、昔の子どもと今の子どもなことなど考え合わせてみようというわけなんです。

霜田 私は楽観論者なんですよ。ニイルもそうですが、人間は明かるいものを求める傾向があると思っています。特に日本人は昔からそういう傾向があったんじゃないですかね。

◆明治に育つ

——盛り上がる時代と努力する子ども

周郷 先生は八十歳になられた。幼児のころっていつごろでしょう。

霜田 生まれが明治二十三年です。から、学校に入ったところが日清戦争でした。日本が新しい世界に向かって盛り上がった時代ですね。徳川時代の圧政から抜け出して世界の文化を吸収し、明かるい世界に伸びようとした時代でした。私の幼児から少年・青年にかけて、日本の盛り

上がりが肌で感じられたものです。

周郷 確かに日本の盛り上がったいい時代でしたね。先生の幼児期から青年期へかけては、本当に希望に燃えていたわけですね。日本人全体も今のように気持ち複雑じゃなくて、素朴で単純だったんじゃないですか。

霜田 そうです。先生の教えがそのまま信じられた時代でした。例えば日本は

どよい国はない、世界に誇るべき国体だということ素直に信じたものでした。

周郷 それで別に横柄とか高慢にはな

らなかつた。

霜田 そうです。外国の文化には尊敬と憧れを持っていましたしね。日本の国体は比類のないものだ信じて、文化のおくれさえ取り戻せばよい、そのためにはみんなで努力しよう、そういう精神を叩き込まれたわけですね。

周郷 叩き込まれたなんでものじゃない、もっと素直に理解できたんでしょ。

先生の専門分野に入るけれど、無意識っていうものにごりがなくて、もっとサラッと自然だったんじゃないですか。建設的で新しいものも受け入れられる、日本がいい国であるということも理屈ではなく澄んだ無意識でサラッと受けとめたんじゃないかな。

霜田 そう。素直に信じて努力しました

たからね。明治時代の少年・青年は本当に努力しましたよ。

周郷 自発的にね。少年や青年は本気でやる気で勉強したんですね。

これは四国の田舎の話ですがね、高等小学校に入ると学校が近くにない、そこで朝三時ごろ起きて通ったそうですよ。ちようちんを下げてね。

霜田 私は、今浦和市に編入されている松本新田というところの生まれなんです

すがね、駅から四キロくらい離れている荒川のほとりなんです。三年までは近所の小学校でしたが、四年からは師範の附属小学校に通いました。尋常四年と高等

科四年間とで全部で五年間、通ったわけですね。附属小学校はよい教育をしていたと思いますね。何より先生が熱心でね。今は教育実習など当時ほど重きをおかないようですが、当時は一番大事な仕事

でした。附属にはしょっちゅう教生が来

ていましてね、その教生が受け持ち訓導を大事に扱っていましたよ。昔は生徒

よりもいい教育をしていたんです。その一人に特に影響を受けた先生がありましてね、昨年まで文通したり訪問し合

◆ 学校教育の普及と現代の悲劇
霜田 その当時は小学校だって、やり

ったりしていました。当時の文学青年で

霜田 ええ、そう思います。特に附属

たい人だけが行く形でした。学びたいも

してね、「文学は不朽の盛事なり」なんて黒板に大きく書いて生徒の文学熱をおったんですよ。そして、毎日欠かさず

周郷 そこが今どのくらいいいですね。その点、戦後の、つまり現代の問題

日誌を書いてこいってわけで、生徒の日誌に批評を書いてくれるのです。それが嬉しくってね。私がどうやら文章が書けるのはこういう指導のおかげです。ありがたいことでした。

霜田 そう。かつて私は多摩美大で教

がたいことでした。

霜田 一学級四十名でした。でも、高等二年、今の六年になると中学校へ行く

人が抜けて二十名くらいになり、だから入っているんですよ。美術学校へ来る

仕事をしてくれましたから、正規の訓導よりも強い印象を受けました。

周郷 先生は最初の三年間、分校みた

対を押し切って来るんだと思っていま

周郷 つまり、教師と子どもに人間的な結びつきがあって、いっしょに坂道を

さな学校ですか。

一割か二割は何のために来たかわから

上がっていくという感じがあったんだな。それに、昔の方が生徒ひとりひとり

霜田 ええ村の小学校で、三百名くらいでしたかね。義務制も徹底して

学に入れと言われて、試験がやさしいか

ら入ってきたなんてのもありました。

という情勢がなくなりすぎた、みんな

邪魔することは許されない」というんで

代が移るにつれていけなくなってるんだ

こかに入ってしまう。考えてみれば現代

の悲劇ですね。自由の生活ができるんですがね。

な。自発的に何かやりたくて学校に入る

周郷 正宗白鳥などが早稲田大学に入

ったところは試験なんてなくて、本当に入

ってのが少なくなっちゃって。

りたい人は誰でも入れたという。ところ

りしてくると思いますよ。今はやる気も

霜田 そう。学校というのは学びたい

が、そのうち試験に受かることが手柄に

なっていて、受かるか受からないかが中心に

親に反対されてさんざん苦勞しました。

なっちゃった。

自分さえ入れればってわけ。こうなって

ようやく美術学校でも師範科ならばとい

うことで入ることができたんです。そう

くるともう学校へ入ること自体が道徳的

いう時代だったんですね。

周郷 ある意味ではそれが大変な自由

まです。全く変なもので、自

だったんじゃないかな。学校なんて入り

強心とか世間体で勉強するんだから、勉

目になるし、勉強そのものも駄目になっ

たい人だけが入る、入りたくない人は入

らなくていい。

霜田 ニイルの自由主義というのも学

十四、五歳以上は特に志を立てて勉強

しようと思つて入つたわけですよ。今は

やない、ってことですよ。ニイルがよく

志なんか立てないね。志なんか立ててい

るひまがない。そこが大きな問題だな。

であつて、勉強したくなかつたら決して

霜田 本当に学びたい者だけが学ぶ、

しなくともよい。しかし、他人の勉強を

ルの学校と同じとはいえないけど、明治

時代の教育には、そういうふんい気があったんですよ。進取の気性とか立志とかいってやる気があって勉強する。

霜田 そう。確かにそうですね。

それに大事なことは、学校は学科を教えるだけのところじゃない。私なんか、

附属小学校に移って先生が子どもといっしょに遊んでくれるのを知った時、嬉しかったですね。これはいい学校に入ったと、しみじみ思いましたね。先生と子どもが一体となって遊ぶ学校、それが本当の教育ですよ。

ニイルの言ってるような教育が、確かに日本にもあったわけですよ。私なんかの時代には、生活教育という言葉は無かったけれど、生活教育が行なわれていました。

周郷 そう。社会はずい分変わったけれど、新しい教育をアメリカなんかを探しに行くんじゃなく、我々の過去の中に

も求めたらいいんじゃないですかね。

日本の過去に、社会自体が落ちついて希望を持って動いていた時代があって、そこにいいものがあつた。それが、今の

新しい教育とつながるようなものじゃないですかね。

霜田 そう。それに当時は国民全体の生活が根づいていました。今みたいにガサガサしていなかった。

◆ 昔の子ども今の子ども

周郷 ところで先生の小学校入学以前のこと、何か思い出していただけませんか。

霜田 どうも思い出せませんね。記憶に残っているのは小学校ごろからです。私は意気地のない気の弱い子どもでしたよ。なかなか人の中にとけ込んでい

なくてね。

周郷 それは僕なんかも同じだな。僕

は印旛沼のそばで田舎の小学校ですから二百名くらいの小さな学校ですがね、もう人がうようよしていて恐くてしようがない、とうとう恐くて帰っちゃった。

霜田 上級生がおとなに見えてね、そばに来るだけで恐くなりました。

周郷 先日、ヨーロッパをまわって感じたのですがね、ヨーロッパの子どもはおとなしいんだな。日本の子どもと比較すると実におとなしい。ところが、

実ったものや絵なんかはいいんですよ。実におもしろい。そこで以前聞いた話を思い出しました。中国の子どもは魔法びんだって言うんです。つまり、外側は冷たいけど中味はとても温かい。ヨーロッパの子どももそうなんです。日本の今の子どもは逆なんじゃないかな。外はワサワサして積極的だけど。その点、明治の子どもも魔法びんだったんじゃないか。

外見はおとなしく内気だけど中はやる気

があつて志が秘められている。

霜田 今の子どもは、いわゆる情報化

時代でね、外側からの影響が多すぎるん

じゃないですかね。特にテレビの刺激で

いろいろなものがつめ込まれすぎてます

ね。実際に触ってみたこともないのに何

でもよく知ってるんですよ。そして、

テレビでつめ込まれた知識を自分のもの

だと思ひ込む。恐いことですね。

周郷 何か外側から作られちゃってる

んですね。

それに親も、やたらにチャホヤ機嫌を

とるだけで放つたらかし。きちっと育て

ないで何しろテレビ見るんだから。

霜田 子どもたちにお月さまの話をし

ていたら、ひとりの子どもが、こういう

んですよ。「お月さまって大きいんだ

よ。この部屋よりもっと大きいんだよ。

ちよっと見るとボールくらいにしか見え

借りものの知識でいっぱいの子どもの見

ると恐いことだと思ひますね。

周郷 そう。実に観念的。そして、そ

ういう教育を実際にやってるんですよ。

うす気味悪い物知りを作りすぎる。

日本という国は、大正時代から子ども

相手の雑誌が出たりして、子どもを餌に

した商売ができすぎてしまった。そし

て、子どもがさんざんいじくりまわされ

てる。学校も親も、子どもをいじくりす

ぎるんだよ、愛情のつもりでね。そつと

しとくのが愛情なのに、間違えてる。

霜田 自然の中に育つのが大切な

に、それができないのが現代の不幸でし

ょう。

周郷 子どもってのは自然の一部で神

秘的な存在なんだ、そもそもね。アメリ

カ流の心理学なんかではわからないよう

精神を計量的に扱いますね。計量で

きない部分に本当のその人がかくれてい

るものなんですかね。

周郷 そう。子どもは計量以上の存在

なんだ。外から見えて、計算できるもの

に引きずりまわされていますよ。

日本人なんて本当なら内気なものなん

だ。それが今は、内気なことはいけない

ことみたいでしょう。内気な人の中にあ

る本当の大事なものを殺してしまってい

ます。現在の子どもが学校に入るってこ

とは、大事なものを殺されるってことに

もなる。教育と称して、国民的な人殺し

をやってるんじゃないですか。

霜田 そう。人間の本当の深いところ

をよく育てないかね。今の日本の子ども

は、外面的なものに引きずりまわされ

ぎているし、学校も外側だけを育ててい

る。これが、現代の一番の問題でしょう

ほんとうにうれしいことだ。

まだまだ微々たるもの、不十分ではあるが、坂田文部大臣はじめ、私学のことを真剣に考えてくださる人たちによって私立幼稚園のためにもきつと脚光をあびる日が来ると思う。昨冬のある日NHKで行なわれた教育座談会では、代表の先生方全部が（代議士、文部省、日教組、小学校長、幼稚園長、教育評論家）私立幼稚園が日本の国の幼稚園を支えていて、現在も三分の二は私幼であることを認め、公立幼稚園増加とともに、私幼発展を「国が助成」しなければならぬことを発言しておられたこともほんとうにうれしかった。

制度の上からは幼稚園教育発展の糸口は、もうはつきりとしてき上がり、ことに先導的試行の結果が認められ、十年先か、二十年先に、用意万端整ったところで（子どもひとりひとりの身心の調和的発達からみて、私立幼稚園の発展や、幼稚園教育の体系づけなどの）幼児教育の義務化が実行されるならば、幼児にとって何と幸せなことだろう。

憂い

1 幼稚園の「生いたち」にしみついていてぬぐい去れぬもの

○私立幼稚園の体質

制度に守られても、国が豊かになっても、また、こんなに脚光をあびてきた幼稚園教育でも、どうにもならない「幼稚園の体質」は、今後の幼稚園教育の発展をはばむのではないだろうか。それは私立幼稚園の中だけにある個人立と法人立の関係やその他、すべて幼稚園の誕生から歴史につながる、どうにもならないことなのだろうか？

日本の幼稚園の多くが「特権階級の子弟を預るところ」として誕生したため、上流社会の礼儀作法を身につけさせることを保育内容として行ない、おとなの気のすむような躰の結果は、「行儀よい子、すなおで何でもいうことをきくよい子」として結果を求め、その保育法も、それぞれの幼稚園から生まれ、みよしみまねで伝わり、固定して一定の型となり、また、そうした先生方の中には「徒弟仕込」でこそ立派な保母さんができあがるものと信じて封建性も加わり「幼稚園の保育の型」が根をおろしている、ことも事実だ。私立幼稚園が日本の幼稚園界に大きく貢献している反面、こうした中でつくられた歴史の中にはいろいろな問題もある現状だと思う。とくに私財を投じて幼稚園経営にあたるその運営が、「保護者はお客さまだ」という考え方から、その保育内容や、職員の勤務の仕方にまでつながって、どうにもならない幼稚園の体質となっているのではないだろうか。

○公立幼稚園の体質

公立幼稚園にしても、その誕生がやっぱりどうにもぬぐい去れないもの、をしみつけてしまっているように思う。大部分は小学校内に併設として誕生し、すべてが小学校の借りものだった時代がある。園長も小学校兼任で「あいさつ園長」といわれる時代もあって、その幼稚園の運営は主任教諭の人柄や勉強ぶりによって幼稚園の保育形態までも固定させているところがなきにしもあらずで、今後ますます増加していくであろう市町村の公立幼稚園のことが心配でならない。そしてこうしたことが公立幼稚園の対立にもつながっていくことを残念に思う。

もちろん現在では日本じゅうのあちこちに、新しい幼児観をもつてすばらしい幼稚園教育にとりくんでおられる先生方が私立にも公立にもたくさんおられるので、やがてこの「体質」は消えさることは思うけれど、日々進歩激変している時代の幼稚園がこれでよいだろうか。

2 教員養成につながるもの

世の中の人たちはもちろんのこと、同じ初等教育の道に手を取りあって進まねばならない小学校の先生方の中に、幼稚園教師に對する偏見はないだろうか？ もちろん同じ校地内に園舎をもって毎日幼稚園の先生方の努力を知り、語り合っておられる先生方

には考えられもしないことと思うが、実態をよく知らぬ先生方の中には一段も二段も低いものと考えておられるのではないだろうか？ また、世の中の人たちは幼稚園の先生方の給与の低いことと並行してその身分を考えている人たちもいるように思う。

これらはすべて教員養成機関の立ちおくれによるもので、幼稚園が脚光をあびてきても、やはりそのイメージは変わっていないところもあるように思う。

一方では幼稚園の先生自身劣等感をもっている人たちも多いのではないだろうか。（高校卒業者がいわゆる徒弟仕込みから有資格者になったというところで）戦前はいくら勉強しようと思っても地方にはあまり養成機関はなかったし、私立幼稚園の若い先生方からきく苦情は「勉強ができ得ない」ということが多かった。

これは私の一方的な解釈かもしれないが短大や四年制の学校で専門に系統的な勉強をしてきた人たちが新卒当時は現場に快く迎えられるのではないだろうか？……と、これも幼稚園教員養成の立ちおくれにつながるのだと思う。しかし、また、現代の人の中には何の自覚ももたず、やる気もなしに先生をしている人もなきにしもあらず。

今後設置の義務制が立法化されれば、教員養成にも、また資格の上にもきびしい反省がなされる時がくるのではないだろうか？そして幼稚園の現場にも再教育や研修の道がもっと開かれてくる

ように思う。その時を待つまでもなく、私たちは今から再度勉強の方法を考えねばならない。

希いをこめて

今から三十年前、二十年前の、全身でぶつかっていた「幼稚園の先生時代」が想い出される。あのような生活をもう一度、今の子どもたちに味わわせてやりたいものだ。

●幼稚園の往復には必ず友だちを誘い合せて登園させ、保護者の付き添いを禁じて保育効果をみた時代には、子どもの誘いかいや今のような交通事故など考えてもみなかった。一週一回の園外保育には少人数で主任教諭と担任だけの生活ですべてが子ども同士自主的活動ができ、市電から地下鉄に乗りかえたり、国鉄山の手線をのんびり一まわりするなど、二、三十分間の徒歩見学は都会でも十分実施でき得たのに、今の子ども達の生活の変化はなんとあわれなことだろう。これも公害の一つ？

●一日がかりで作った砂場の遊園地が「あしたの朝までこのまま崩さないでね」と、ひらがなで書いた担任名の立札のおかげで、そのまま残されていた子ども心は今でも持ちつづられそうに思うけれど……、むずかしいことなのだろうか。

●狭い幼稚園の庭を隅から隅まで利用して、小鳥はもちろんのこと、ウサギ、ニワトリ、リス、伝書バトまで飼いならして子ども

たちのよい遊び相手をさせ、ニワトリの生んだ卵がゆで卵となつたのしんだのは、戦後の物資のない時だっただけにうれしいことだった。しかししばらくたってからは一夜にして伝書バトが全部盗まれたり、小鳥はネズミや猫に食べられること何回か？ 苦労した生活のあれやこれやがみんなつかしく、その時のことがいきいきとした子どもたちの顔といっしょに目に浮かんでくる。

今、何よりも残念に思うことは、都会ではもうニワトリも飼えない。昔は幼稚園のニワトリの鳴き声をきいて早起きができる、喜んでくださった人も多かったのに、今では「安眠妨害」とたびたび苦情をいわれてニワトリ小屋をとり除かねばならないという話を聞いて、子どもたちのために何ともいえない、やりきれない気持ちでいっぱいだ。（この原稿をかいていたときにも、東京板橋区のある幼稚園で五回もつづけて、飼育している小動物が一夜にして全部猛犬に食べられてしまい、そのむごい記事が写真入りで新聞紙上に記されているのを見て同情にたえなかった）以下省略。

まだまだ数限りなく想い出され、移り変わる社会情勢におし流される子どもたちの生活を公害から守るのはそれぞれの幼稚園の先生方の責任ではないかと、これも自分自身を大いに反省する。

幼稚園の適正人数

南 信 子



現在の日本の幼稚園教育において、一般的にいえることは、各

園の園児数は、当該年度の入園希望者数によって定まるのであって、各園の規模の大小も、教育をするための適正人数を考慮して決定されているというよりも、たいていは財政的な制約や園地獲得の条件等によってやむをえない状態で発足したといったものが多いようであり、定員あつてなきがごとく、その場、その時によって変えざるをえない状態ではないかと思う。こういった現実の中で、幼稚園の適正人数について考えてみることは意味のあることである。

適正人数はつきにあげられる諸条件によって総合的に考えられなければならないし、それらの問題はたがいに深くかかわりあっていることを知らなければならない。

一 幼稚園教育の目的の達成

幼稚園教育はいうまでもなく、知識や技術を教えることを目的とせず、人間の人格の基礎が形成される重要な時期に、人間として必要な基本的な生き方を教え、その生活態度や習慣を身につけるように助けることがねらいであり、しかも家庭教育では与えることのできない集団生活を通してそのねらいを達成することを期待しているのである。集団は子どもたちによって構成されているが、中心となっているのは教師である。

子ども同士、教師と子どもたち、こうした独特な環境の中で、ともに生きる感覚と意識を育てながら目的を達成しようとするのであるから、こうした観点にたつて幼稚園の適正人数を考えてみなければならないと思う。もちろん幼児はどんな大きさの集団の中で自分を確立することが可能であるか、集団の中で彼らの交わ

りはどのように展開するのか、その科学的な研究なくして適正人数を考へることができないが、まず、幼稚園教育のねらいとする点にしっかりと立脚することが大切である。人間の人格は、人格とふれあつて形成されるのであり、人間らしい人格を育てるためには、何よりも人間的な交わりのできる環境でなければならぬ。

おとなである教師が、幼い未熟なひとりひとりの人格にふれ、子どもたち同士も互いに人間としてふれあうためには、きわめて少数のグループにのみそれが可能であることは常識であるといつてよい。

二 保育内容とその方法

つぎに、幼稚園教育の目的を達成させる方法として、具体的に子どもたちにどんな経験を与え、どのような保育形態によつてその経験を展開させるかが問題である。壇上になつて一斉に子どもに理解できる教訓を与えるのは、少しなれた技術をもつておれば、相手が数十人でもあまり支障を来たさなないかもしれない。あるいはテレビ番組を視聴させるだけならば形態をよく配慮すれば大型のテレビで三十人位は可能であろう。また歌をいっしょに歌うのは、ピアノの伴奏がしっかりとおり、中心に教師がたつてよく指導すれば相当数の子どもを集中させて歌わせることができるであろう。

しかし自由遊びなどで子ども各自がめいめいの活動をする場合に、ひとりひとりをよく観察し、彼らに問題解決の能力を与えようとするならば、あまり多数では困難である。しかも幼稚園教育の中心となる形態は遊びであり、生活指導であるべきことは多くの人の意見の一致するところであるが、子どもの遊びのなかで、教育が果たす役割には非常に深い配慮と、個々に対する理解が根底に必要とされるのであり、生活指導はほとんど個人指導の意味をもっているときえ考えられる。こうして考えると幼稚園教育は何といつても少数主義によらなければ効果をあげることができないことはたしかである。集団で単にテレビを見たり、歌つたり、話をきいたりするプログラムだけでは幼稚園教育の目的を果たすことができないし、集団保育の価値を強調し、彼らが互いに集団の意識をもち、役割を分担し、話し合うことを基本に考えると、彼らの発達段階からくる限界をみとめざるをえないのである。すなわち幼児の場合、彼ら同士が話し合い、互いに理解し合える範囲はきわめて少数であるからである。

このように、適正人数を考へる視点は、その保育の内容と、それを展開させる保育の方法、形態によつて異なつてくることを考へなければならぬ。

三 幼児の発達段階

幼児の社会性の発達による遊びの分類について研究されたものによると、幼児期は、ひとり遊びから、二人遊び、連合遊び、共同遊びへと発展していくといわれるが、幼児期の後半になってようやく数人から十人以内の共同遊びがあらわれ、それが可能になるわけであるから、きわめて年齢の低い幼児はおおぜいの集団の中にいたとしても、あまり互いにかかわりをもつことは少ないので、部屋の大きさ、あるいは教師の数によっては、自由な遊びをわりあいに支障なくすることができる点もあり得る。

しかし発達とともにグループができ、そのグループ構成によって子どもは互いに啓発され成長していく要素が大きいので、その自然発生的なグループを背後でよく調整し、それぞれの望ましい個性をよく発達させ問題解決の力が育つよう配慮するためには、一人の教師にヘルパーをつけたとしても、五、六人ずつのグループが三つ四つある程度が可能な限界となるのではないかと思う。

四 クラス組織

幼児期は、その生活のほとんどの時間を家庭で過ごし、幼稚園という集団生活に初めて入るのである。ところが現在の家庭における家族の人数は非常に少ない核家族となりつつある。大家族であっても十人をこえる家庭は少ないのではないかと思う。そうした家庭の生活から第一歩をふみだし、未経験の生活に入る幼児の

ために、あまり急激な変化を与えないことが望ましい。この観点にたつて、幼稚園の学校的性格をだそうとするならば、その適正人数はおのずと限定されるのではなからうか。

しかしまたあまり少ない人数では、ふれあう個性の幅がせまくなるので、教育の効果を十分にあげることができない点もあり得るわけである。女兒ばかりが多いクラスに男児三、四名しかいないといった状態では、問題も多いので、そのバランスを考えたりすると、地域の要求で入園希望者の多い場合には、同じ年齢の子どもたちの数を多くして、幼稚園全体の人数をふやすことを考えなければならぬ。

このクラス単位の教育が徹底しており、そのために設備がととのえられておれば、幼稚園全体としては、その地域の要求や、施設、設備、通園等の問題に支障のない程度に規模を大きくすることも無理ではないと思う。しかしクラスの数は多く、保育内容はほかのクラスと合同で一斉にする点が多く、設備や教師の人数が十分でないのでは、いわゆるマンモス幼稚園の教育の危機といつて過言ではない。

アメリカの三歳児のためのナースリースクール、年少のためのジュニア・キンダーガーデン、年長のためのシニア・キンダーガーデンの組織のように、それぞれ独立した形態で保育を行なうだけでなく、建物も設備も別に持ち、行き届いた教育をすることが

できるようになっているのは、こうしたことについてのよい参考になると思う。

日本の幼稚園は年齢を三、四、五歳児を対象とし、しかも一つの施設で、一つの教育課程で、希望者の多いところはマンモス化、少ないところでは過疎化して混合保育をするといった教育では非常に問題があるのである。行政的に現代の住宅の分布の実態とその対家人数に即応して教育の問題を考えることが急務である。これは教育全体の問題として社会の関心事となり、よい解決の道が示されなければならないと思う。

地域の実態により、規模の大小が考えられ、その適正配置がなされ、一つの園の適正人数が考慮されることが大切である。それにしても、幼稚園設置基準に示される一学級四十人以下を原則とするということは問題があると思う。それは前述した観点から考えるからである。今や小学校でも一組四十人以下を限度とするのが常識であるから、幼稚園についてはむろんのことである。

五 教師の人数

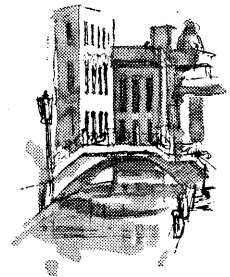
以上すべての問題と直接、密接なかかわりをもっているのは教師の人数の問題である。一つの考え方は、幼児の場合、一つの集団に一人の教師が適当か、一人以上いることが望ましいかという問題である。最近小学校教育におけるチーム・ティーチングの研

究がなされているが、幼児教育にこの原理を適用するとどんなことになるのか。知識や技術の教育ではないという観点にたつと、この問題はいささか不利のようであるが、教師といっても千差万別の個性と人格をもっているため、在園期間中、おもにただひとりの教師の感化だけを受けるといふことは果たしてどうか。幼稚園の家庭的性格を考えても、あらゆる機会をつくって、クラスの教師以外の教師とも接触をもつことは大切なことである。

三歳児の入園当初は、まず一人の教師に結びつくことが、その教育の効果をあげるに重要であるが、漸次、視野をひろげさせることが必要となってくる。そこでクラスに二人の教師がよいチームワークをとるならば、その集団の人数も、一人で担当する場合と少しちがってもよいのではないかと思う。

教師の人数が一人である場合には対象である幼児の年齢、クラス構成員の状態によってその人数が考えられるべきであり、三歳児で十人平均、四歳児で十五人、五歳児で二十人等、今日までの研究の例等を参考にし、保育室の大きさ、設備等、その他の条件を総合的に問題とすることが大切である。また教師といっても、短期大学を卒業して最初の年の経験を教師の場合と、いわゆる成熟した教師の場合とで配慮されなければならないということ、保育というわざの特質から考えて当然であるように思う。

初等・中等教育の改革に関する 基本的構想試案をめぐる



海 卓 子

はじめに

数年前、灘尾文相の「五歳児就学」をめぐる発言をキッカケにして、昭和四十四年六月の中教審の中間報告「わが国の教育のありゆきと、今後の課題」今回（昭和四十五年五月二十八日）の中教審の中間報告「初等・中等教育の改革に関する基本的構想試案」に至るまで、このところ幼児教育をめぐる、重要な発言が続いている。幼児教育に対する関心が、これほどたかまわっているのがある。幼児教育に對する関心があるが、なぜ、このように幼児教育がクローズアップされているのであろうか？ 経団連あたりから再三、五歳児就学を訴える発言があり、これに呼応するように全国連合中学校校長会もこれに賛同の意思を表明する。全国連合小学校校長会は、検討の結果時期尚早を訴えている。五歳児就学

の理由は、立場により多少のちがいがあつた。財界筋は若年労働者の不足から労働力確保のための就学年齡引き下げを、また、高級技術者養成を目的として才能開発を主張している。文部省はこれらの要請にかんがみ、幼児の早熟化、幼児教育の普及に伴う地域差、都市化に伴う幼児生活の環境の悪化などをあげて、幼児教育充実をうたつてゐる。しかし、眞の意図はどこにあるのであろうか。

「戦前、国が学校教育の内容に深く関与したことが、国民の考え方を偏狭な国家主義に導いた原因であるとして、教育行政の役割を外的な教育条件の整備や、単なる指導助言だけにとどめるべきだとする考え方が国民の一部にある。しかし、民主的な国家にはそれ自体の理想があり、これに向かつて国民的、なまとも、八傍

点筆者Vをはかることは、公教育の任務の一つである。△試案第一初等中等教育の根本問題2 Vこれは幼稚園教育を小学校教育の中に組み入れ、一貫した教育課程の改訂と試案第2(2)公、私立学校の行政管理を一元化し、都道府県知事の所管から、各教育委員会への移行を考えている。△試案第2 Vこれは全国幼稚園数の七〇%を占める私立幼稚園を統制する一つの方法とも思われる。沖繩返還に伴い、アジアの防衛を米國から肩代わりする立場にある現状を思うと、その國民的、ま、と、まりは、民主的な國家とは逆の方向に進むのではなからうかと不安が広がる。

以下、現場の教師として「試案」に対する考えを率直に記してみよう。

一、先導的試行をめぐる

四、五歳児から小学校のある学年の児童までを同じ教育機関で一貫した教育を行なうことによって、幼年期の教育効果を高めること。

△試案第2、1、(1) V

(1)のねらいは、幼年期の集団施設教育のさまざまな可能性を究明するためである。

△中略 V幼年期のいわゆる早熟化に対応する就学の始期、の再検討、早期教育による才能開発の検討などの提案について具体的な

結論を得ようとするものである。△同上(2) V といって、先導的試行の必要をのべている。

「早熟化」といっているが、身長、体重の増加をさしていわれるのであるならば、平井信義氏は、「量と質の問題がすりかえられている。体が大きければ機能がいいと思うのなら、肥って大きい人は機能がいいということでしょう」△昭四五年、四月号「保育の友」幼児の就学前教育を考える(座談会記録より) Vと、いわれている。現代の子どもは、戦前に比して、体が大きいにもかかわらず、繩とび、鬼ごっこなどの遊びにみられる運動能力、遊びの要領の低下が目立つのである。

学制改革に当たって基礎調査をしておられる担当官の一人が、
「身長も伸び、体重もふえて発育がよくなったのに、私立幼稚園などでは先生が子守と同じように一日、子どもをブラブラ遊ばせている。それよりも、五歳で就学させて、字や数でも教えた方がよいのではないか」とつぶやかれた。私は自分の耳を疑うほどショックを受けた。私は「子守」といわれたことを怒っているのではない。この頃は母親でも「集団生活をさせて社会性を育てたい」というご時世である。にもかかわらず幼児教育に関して、この程度の理解しか持たれない方々が集まって、国策を論じられることに大きな矛盾を感じたのである。

しかし、落ち着いて考えてみれば、中教審の委員といわれるような先生方はえらすぎで、子どもとは関係のない方々である。考えようによれば、どなたでも同様の発言をされるのではなからうか。現場の教師が専門職として一人も参加していないところにこのような問題が起きるのである。もとを正せば教師の努力不足で、一般の人々に、幼児教育を小学校とも質的に異なる専門分野であるという認識を持ってもらうための業績をあげていないからであろう。

○ 教育とは金のかかるものである

昨秋、米国の女教師が私どもの幼稚園を見学に来られた。子どもたちの遊んでいるようすを一通り見てもらい説明したあとで、「教師が一人一人の子どもを教化するという考え方には反対である。教師はコンダクターであって、それぞれの音色（個性）を出す子どもたちを、うまく組み合わせて、好ましいハーモニー（集団作り）をかもし出し、その一人一人の音色を高めていくものである」といった。彼女は手を差し伸べて握手を求めながら「自分も同感である」。しかし、一つ疑問がある。こんなにおおぜいの子どもを少数数の教師で預かっていて、どうやってその目的を達しているのか？」と。

私は完全に頭を垂れた。一番痛いところを突かれた。当園では

四歳児二十五名、五歳児三十名で、現行法定員四十名よりも、はるかに下まわっている。にもかかわらず、一組の子どもを掌握できるまでには数年以上の経験が必要とする。一般的に言えば確かに不可能なことであろう。彼女は教師一人につき十五名〜十八名くらいの幼児であると答えられた。

六三制教育の歪みと、よくいわれるが、その一つは十分な教育環境の整備（定員、設備など）がなく、形だけがとのえられたところに大きな原因の一つがあるのではなからうか。昭和二十三年、新たに出発した新教育の一年生の授業を見学した時の光景がまざまざと思い出される。五十人以上の学童を、七、八人のグループに分けて、卓を囲んで話し合いをしている。子どもたちはワイワイ、ガヤガヤと騒ぎ、ある者は机の下で絵本をめくっていて。私は教室内にいたたまれず廊下に出たものであった。

・ 幼年学校のそれぞれの学年は、どのような教育を受けた教師が、どのような資格の下に、どのような教育計画で行なうのか。
・ 先導的試行であるとすれば、対象となる子どもは、何によって選別するのか。

・ これらの教師の養成はどこで、どのようなやり方で行なうのか。

ことに大脳生理学の理論をもふまえて、一人一人の子どもの資

質を開発するユニークな教育構想といえ、時間と、金と人材を得なければできないことであろう。一步誤れば、四歳から、子どもを差別して、教育の機会均等という主旨からはずれ、いたずらに「教育ママ」をおおって、三歳から文字を教えようとして死に至らしめたり、他人の成績をうらやんで放火をしたり、というニエース種が続出しなとも限らず、教育の混乱をもたらす原因ともなるであろう。

○ 幼年期の教育は生活の中で

能力とは、知っているということではなく実行することができ、ということである。幼児の場合は、具体的な生活の中で、子どもの経験を一般化し、知っていることをやってみてたしかめ感情や行動力を育てあげるということであろう。

例、立場によって発言の内容がちがう。

さちこ（五歳）はブランコの（四歳児組）前に並んで、順番をまっていたが、なかなか代わってくれないので、とうとう先生のところにいつつにきた。

さちこ 「カゾエタノニ代ワッテ クレナイノ」

ゆみこ（四歳十一カ月） 「ダッテ、ノリタインダモン。ロケッ

トグループ（数人ですわる座席グループ）「ジャナイモン」といって、先生が付添っていても承知しない。

先生 「そう。このブランコ、ロケットグループのもの、ロケットグループしか、のっちゃいけないの？」といあわせた子どもたち（四歳児組）にきく。

子どもたち 「チガウモン」 「ヨウチエンノダモン」 「ダレデモノッテイインダモン」と、ワイワイ、さわぐ。ゆみこも、ついにしぶしぶとブランコから降りた。しかし、「チガウモン」と抗議をした子どもたちが、自分がブランコにのっていて、代わる立場に立った時に、はたしてすぐ代わるであろうか。モットノッテイタイ、という欲望が自分に都合のいいような理由を考えつかせるのである。ここに机の上だけではできない教育がある。一つのブランコをおおせいでどうやって使うかという学習では正しい答えが出せても、実際に自分の欲望をコントロールして、相手の気持をくみとることはむずかしい。初めは友だちに文句をいわれてイヤイヤ代わったものが、友だちとの間に友情が育って、自分から貸してやる、交替することに自分が乗っているのと同様の、あるいはそれ以上のよろこびをも感じられるようになるものである。

このような生きた能力は、あそびやしごとを通してしか育てることはできない。幼年教育というからには、「おべんきょう」という子どもがそっぽをむくような教育はしないでほしい。机と教室から子どもを解放して、経験の抽象化と、より発展した経験

をさせるための系統的な教育計画をねってからにしてほしい。

「生活的である」という意味では、現在の保育所の子どもたちの生活の中に、ほんとうの知恵を育てるものがあるのではなからうか。

昨日も私立のある保育所を見学に行ったが、午睡の仕度は四歳、五歳児の手でとどのえられた。四歳児は床をはき、マットをしく。五歳児は布団をしく。しき終わると数を確認する。

四十三組したが、二十人位の子どもが一人ずつ布団の上を歩いて数える。四十、四十二、四十三、四十五などと数が割れてしまふ。中間になると気がゆるむのか、数を忘れたり、歩幅に合わせて一枚のふとんを二度数えたりする。自分たちのひるねに響く仕事だから、子どもたちも真剣に、四、五回数えなおした。遂に四十三が大当たりということになったが、初めに正しく答えた子どもは二人に過ぎない。

幼年学校が小学校の体系の中で、教課的に室内と机の上で、ことのみで行なわれるとしたら、現在の保育園、幼稚園のあそびやしごとの実際場面に培かわれていくほんとうの知恵は育たず、幼児教育は崩壊する。

○ 対象幼児の選別について

現在の入学試験と同様、いわゆる知能テストなどが選別の道具

として使われることであろう。知能テストは周知のとおり、精神薄弱児と正常児との識別に使われるものであり、正常児の能力差をはかるものとしては不備と思われる。

例、二十の逆唱はできたけれど――。

あつお（五歳六カ月）は、鈴木ビネーテストにある「二十の逆唱」は四十秒以内で完全にできた。しかし「釣銭の計算」（十円でお菓子を六円かった。おつりはいくらか？）はできない。これは何を物語っているであろうか。「二十の逆唱」ができるということは、二十の数の構成がわかっていて、ということと考える。この場合には十一・六は簡単にできるはずだ。それができないということは、二十の構成もわかっていないのではないか。すなわち、歌と同じように二十、十九、十八、と記憶している。数の問題が、記憶の問題にすりかえられているのである。記憶力さえあれば、たいていのテストの問題は練習次第でできるようになるであろう。しかし、このような能力？は、創造力とは何のかかわりあいもないものと思われる。どのような選別の方法を使うにしても、四歳から別コースをとるべく選別されるということは、悲劇以外の何物でもない。

二、先導的試案の影響について

日本では「お上の方々」の発言はつよい影響力がある。この数

年は五歳就学問題で明け暮れ、時期尚早ということで、やれやれと思う間もなく、「先導的試行」と称して幼年学校案が出されたのである。

昭和三十八年文部省で打ち出した「幼児教育振興七カ年計画」も予算の裏づけが不十分で、過密地域または僻地につくられるはずの公立幼稚園が都心部の過疎地域で学童が激減した弱小小学校の空教室を利用してつぐられ、区議会では各小中学校に幼稚園を付設するという決議をしたり、実際に区内の全小中学校に幼稚園を設置したりした。その結果、私立幼稚園が廃園のやむなきに至るのほもとより、公立幼稚園さえ、四歳、五歳の混合組、あるいは単学級団などができてきて、保育内容の低下を来たしている。

ましてや、「試案」では、公立幼稚園の設置を、市町村に義務づける（試案第2、6、(1)Vという。公立小学校さえ、過密地区はその建設が追いつかず、校庭をつぶして違反建築までしているというのに、多少の補助を得ても、どうして、幼稚園まで建てることのできるであろうか。結局七カ年計画の二の舞で、幼児や児童のいない地域に、私立幼稚園をおびやかしてかっこうをつける以外に方法はないであろう。公立幼稚園をつくるのなら、ほんとうに内容の充実したものをつくらなければ意味がない。このような政策のひずみが地道に教育に精進している良心的な私立幼稚園

をも消していくのである。保育園も新設がおさえられて、乏しい町村財政は幼稚園建設にまわされるのではなからうか。

家庭の親は必死になってわが子の幸福を願うから、才能を開発するという特別コースにのせようと、子どもに「おべんきょう」を強いるであろう。子どもは四歳から狭き門の受験競争にまきこまれることになる。もう現在では、「教育ママ」を責めるより、「教育ママ」も時代の被害者であるということを知らなければならない。

おわりに

昭和四十五年十月二日付東京朝日新聞に「初中教育の改革案後退」という見出しで、十月一日に行なわれた中教審第二十五特別委員会の経過を次のように報道している。

「意見聴取や公聴会を通じて多くの疑問や不安の出た「初等中等教育の改革に関する基本構想試案（五月に発表）」の内容を再検討した。その結果、試案の柱になっている教育改革の「先導的試行」について『制度上特例を設けて限定的に行ない、総合的評価をしてから、全国的な学制改革に拡大するか、いまの六・三・三制と並列的なものとして恒久化するかを政策的に判断する』ことを決めた」とある。このような良識をもって、検討の上次回の報告までに大幅の改正を、切に望むものである。

幼児教育の課題

最近、幼児教育は、多くの人々によって論議されることが多くなった。そうすると、しばしば議論が空中に浮いてしまつて、幼児そのものについて、地味にとりくみ、幼児の身になつていろいろの角度から考える議論が少なくなつてきているように思う。世間で話題になることについてみんながおしゃべりをし、そのことを通して幼児をみるが、その見方は一面的になつて、それが幼児の生活を歪めたり、おしつぶしたりしうになる。幼児と常に身近にふれていて、考えが修正されていかないと、議論がどちらに走るかわからない。

最近数年間にわたつてとくに論議されている幼稚園の義務化の問題や、最近の中教審の答申をめぐる問題などはその例である。いま直ちに義務教育年齢の引き下げという形で行なわれなくとも、大勢は義務化に向かつて動いているであらう。義務化に反対

津 守 真

するような意見は、世間の趨勢を知らぬ非常識論とされるか、反体制的意見とみなされるようなことになりかねない。しかしそういう意見は、たいてい、幼児のことをよく知っている人たちから提出される疑問である。

幼稚園にいきながらなくて、毎朝苦勞を重ねている親は、いまこの瞬間にでも、どれだけおおぜいいるかわからない。そのことで、いろいろ手をつくしながら、どうしてよいかわからないでいる先生たちは、またどれだけおおぜいいるであらうか。登園拒否という主訴で児童相談機関にどれだけの子どもが来ているであらうか。こういう子どもたちは、いまの状況だと、何とか適応させなければという方向にいろいろの人が動くであらう。

しかし、幼稚園時代に、幼稚園にいきながらなくて親や先生を手こずらせた子どもの大部分は、小学校の二年か三年になると、

親や先生もほとんど忘れてしまふくらいに成長している。幼稚園のときに休みぐせがつくと小学校にいつてからこまるといふたぐいの議論は、結局おとなの議論にほかならない。幼稚園教育としては、いかにして子どもが幼稚園にいくことに意味を見出すようになるかをくふうすることが第一の急務である。

幼稚園を子どもが自分のものと感ずることができ、幼稚園に行くことが心から満足のものとなるならば、その教育は成功したものといえよう。これはなかなかたいへんなことであつて、全国に何万とある幼稚園のクラスのことごとくがその条件をみたしうるとはとても考えられない。

幼稚園にいきたがらない子どもはあとを絶たないだろうし、幼稚園にいかない方がよりよい生活になるといふ子どもも、あとを絶たないであろう。だから、幼児にたえずふれている人たちにとっては、子どもが幼稚園にいかねばならないという状況をつくり出すような風潮には首をかしげたくなる気持ちがきつと心の一部にあるであろう。義務化の問題は、こういうことを論議の中に十分にいていかないと、幼児にとってよくない結果になるであろう。

未熟であることの重要性

幼児にとつて一面的な議論の最近の問題として、極端な知的教育導入の論もあげなければならぬであろう。本来、知的な面の

教育は幼稚園において重要な課題である。しかしそれは、幼稚園の生活の時間の一部を、文字や数の特殊な訓練にあてるというような形でなされるものではない。もっと生活に根ざしたものである。ところが、最近はこの特殊な知的訓練の推奨者であるに出して、ピアジェがこのような特殊な知的訓練の推奨者であるかのような議論がある。それではピアジェの意図をあまりにも拡大した論となろう。ピアジェは、知能を、生物としての柔軟性を備えた生活体としての人間の全体との関連で論じている。幼稚園の単純なプログラムとピアジェの理論を直接に結びつけていくことはできないと思う。ピアジェのぼう大な理論体系は、人間を機械的に考える考え方は反対のものであり、人間を全体としてみる見方に立っている。その意味でピアジェの理論は現代心理学の中で重要な位置を占めるし、幼児教育とも関連が深いと思う。しかし、それは知的訓練プログラムを幼稚園生活に機械的に導入することによつてではないと思う。

現在の幼稚園界における知的教育論については、なおいくつかの問題がある。その一つは、早期に知的教育、とくに文字や数の教育を行ない、知的発達を促進させるといふ考え方である。その議論で重要なことは、早期に促進させられるもののあるところには、そのかげに発達のとめられてしまうものがあることを認識することの必要性である。文字を知らないからこそ、子どもは絵本を見て、とらわれずに想像し空想することができ、未熟な段階

はその段階でなければ得られないものがある。未熟ということすらできないのであって、発達の時期はその一つ一つが重要であり、その時でなければみせないものがある。幼児期には、人間のいろいろの要素が混沌としてはいっているものであって、ことばで分類してしまうことのできないような要素がたくさんある。それだからして、それから後、人間の多くの機能が分化していく母胎となるのである。

多くの可能性をもった幼児、夢や空想の世界に住んでとんでもないことを考え出す幼児、自分の思ったことを実現するのにエネルギーの出しおしみをしない幼児、生き生きとした人間の本来の姿であるような幼児の生活を、幼児教育はたいせつにしなくてはならない。

過去と未来から解放されて

保育者の側から、日々、幼児と接するときの条件について考えてみよう。保育者が幼児の集団の中にあつて、何をなすべきかを考えるときの発想として、その日になすべき予定をしつかりと決めておいて、できればそれを文字に書きとめておき、それに沿つて實際をすすめることにより、よい教育ができるという考えがかなり根強い力となっている。しかし、このことはもつと根本に立ちもどつて考えてみる必要がある。

まず、教育が成立するためには、保育者と子どもとの間に人間

的なつながりができることが前提となる。こんなことはあたりまえで、これは指導上の留意点のまず最初にくるといふ答えがすぐに出てくるであろう。しかし、そのことがついになされないままで、幼稚園生活の二年間が終わつてしまう子どもがどんなに多いであろうか。現状では保育者が子どもの心としっかりつながる前に保育者にも子どもにもあまりに多くのことが要求されているのではないだろうか。単元や活動が先行して、保育者が子どもとゆつくりつきあう時間がない。保育者が子どもたちとともに本当に自由になれる時間があまりにも少ないのではないだろうか。しかし、このような人間的交わりが教育の土台なのである。

子どもとのつながりができても、保育者が過去とのつながりで情性に流されて動いたり、あるいは、予定にしばられて動いたのでは、子どもは保育者に依存することになり、子どもが自分から成長しようとする心を育てることができない。いままでこうしてきたからこうすればいい、ということを原理として、保育者がなすべきことをきめるのではない。保育者はむしろ、いままではこうしてきたけれども、いま目の前の子どもはこうであり、自分はどうするのがよいと思うからこうするという動き方をなすべきであろう。その点で保育においては保育経験は過大視されてはならない。また、権威ある説にしたがつて、こういう予定を立てているからこうする、という原理で保育者が動くのではない。そうだとすれば、たとえ自分が立てた予定だとしても、その瞬間におけ

る人間の自主性が失なわれるであろう。そのときに子どもはどのような状態であり、自分はどうすればよいと思うかということ、次になすべきことがきまっていくな。予定を文字であらわすと、それが固定化する傾向があるから、それだけ、この場にふさわしい動きを妨げることになるであろう。

保育者にとって重要なことは、自分がどうすればよいかということ、自分をきめる判断力や想像力や思想を養うことと、自分が容易に動くことのできる身体的技術とこれに伴う精神を養うことである。教育の系統化といつて、おとなのきめた目標を軸にして、おとなの論理と経験で内容を構成すれば、より高度の教育になるといふ考え方は、あまりに直線的に過ぎるであろう。

人に示すことのできるような論理的に構成されたカリキュラムをもつていない幼稚園で、先生も子どもも十分に遊んでいるところに、もっと高度の教育的要素があることを見落としてはならない。また、このことを明かにしていくところに、今後の保育に関する学問の重要な課題の一つがある。

最初に述べたように、中央である話題が提供されると、幼児から切り離して空中で議論が回転しはじめる。私も、それを幼児の生活にひきもどし、ひきもどして、幼児にとってそれがよいのかどうかを問わなければならない。それを問わずして、中央からの指示があるからという理由で、現代の風潮に流されて変革をすることはならないと思ふ。

四、五歳と小学校一、二年生を一つの単位とする学校という考えは、日本の現状から切り離して考えれば一つの考え方として認められることはできる。現状において守らねばならないことはなにか。

第一に、幼稚園の遊びを主とする教育を、小学校の方にのぼして、小学校の低学年を改革していく方向で考えられねばならない。その逆であつてはならない。先導的試行ということにより、現在の小学校の教科主義的考え方が幼稚園教育に逆流することになつたら、日本の幼児の成長に重大な影響をのこすであろう。

第二に、実験として訓練プログラムを幼稚園に導入してみても、その効果を研究するという考え方をとつてはならないと思ふ。教育の場における実験は、常に、このことが子どもにとって役に立つものとなつていかなければならない。

第三に、いままで幼稚園から排除されがちだった子どもたちがふくまれていくような方向で考えられねばならない。ちえおくれ、肢体不自由、盲ろうなどの障害をもつ子どもといっしょに生活する場としてこれが考えられていくならば、日本の幼児教育の将来に積極的な意味をもつてであろう。

幼稚園の現状にも、親の要求にも、子どもにも重荷をかけること多い現代の社会である。考えるべきことはあまりにも多いが、一クラスの人数がせめて三十人になるように設置基準をかえるなど、手近なところに改善すべきことがまだたくさんあるのではなからうか。

お茶の水幼稚園

かたらい

園長室より

ます。そんなある日の話題を二、三お伝えすることにいたしました。

○最近の出版道徳はとても低下していると思う。書く方も用紙の割当て量をまるで無視して書いたり、署名入り原稿は執筆者が全責任を負うべきものなのに編集者が勝手に修正補足したりする。

ひとの詩を自分の著書に引用して出版後「使わせていただきました」とその本とともに一片の走り書き。何という厚顔無恥！

ひと月にいちど時計の針が正午をまわるところ、お弁当を脇にした大学の先生方が、ひとりまたひとりと園長室の戸をたたかれる。周郷先生をかこんで、幼児教育について語り合う集いなのです。

生物学、英文学、教育学、心理学、医学、音楽等々、多彩な顔ぶれで、それぞれのお立場から自由に発言され、たいへん示唆に豊んだ興味ある問題が提供され

とに何の意味があるか、というところまで考えていかねばならない問題だろう。

○幼児教育のむずかしさをいつも感ずる。単純と思われるが、実は一番むずかしいものではないだろうか。逆に言えば本当はやさしいのかも知れないが、あまりいろいろなものが入りこんでむずかしく面倒なものにしてしまったのではないかとも思われる。

幼稚園時代に何をすれば良いか、動物の愛護や自然観察ということひとつをとってみても考えなければならぬことがたくさんあるようだ。本当の意味で「人間を豊かにする」とか、「科学性を育てる」ことになるのかわからない。ここで日本人と欧州人の感覚的な違い。

○二つの自然観について考えてみよう。日本人は古来農耕民族で土地と深く結びつき人間と自然は対立した関係にあるものでなく一体化したものと考える。天は恵みをもたらすものであり、自然を優

雅なものと感じてきた。

一方欧州人は遊牧民族で、動物は狩猟の対象であったし、自然も脅威に満ちたものとして存在していた。彼らは血を見ることにさほど嫌悪感をもたないようなところがあるが、こういう人種は動物に対する愛護の意味も日本人と違ってくるだろう。花も少ないからいろいろ研究して遺伝学や進化論の素地ともなった。

こうして科学は自然を冷静な目で分析し、のりこえていくべきものとして発達してきたのだと思われる。日本人のように山紫水明の世界にいるとかえて科学的な見方は伸びなくなってしまうのではないか。

自然の教育を考える時、この相反した考え方、つまり自然を対立するものとして客観的に冷たくとらえることが人間にとって必要なのか。日本人の伝統的自然観を教えることが将来人間性を育てる上に役立つのか。これをはっきりさせるこ

とがまず重要なのではなからうか。

自然認識のしかたのうちどっちを取るかによって教育のしかたも違ってくると思う。もちろん対立概念でもってくるのは幼児教育には不向きだ。自然観察も即科学とは言えない。科学的な目を育てるのは小学校上級で良いのではないかと思う。それ以前は言葉の厳密な意味を身につけるための国語の時間を多くすべきではなからうか。

幼児時代はあそびをくふうすると家庭に結びついたことをやるべきで、自然に関するものは文学的に取り扱って豊かな夢を育てていきたいように思う。

○公害問題が非常に問題になっているけれど自然の保護ということを考えてみたい。これも二つの考え方ががあるが、何でもそのままとおこうという立場でものを言う人があるが、これは現代では不可能だ。この狭い国土で多くの人口をかかえている日本なのだから、こうしたセ

ンチメンタルな自然保護法ではやっていけない。

これからはいかに自然の計画的な管理を進めていくかが課題になるだろう。

檻の中の動物を観察していても何にもならない。動物がつかれていることを悲しいと感ずる心を育てるためにも、自然植物園のようなスケールの大きいものを考えたいですね。たとえば一つの区を全部とか区の何パーセントかを植物で埋めるとか……。これはたいへん無理な話だけれど人間は不可能なことを可能にできたのだから、広い大きな立場に立つてものを考えていきたい。乗用車は全部廃止してみんなが自転車にのるとかも良いと思う。

空理空論にすぎないと言われるが、それが人間性の回復につながるならば、大いに発言しようではありませんか。

(土屋記)

遊べない子と現代の幼稚園

(1) 楽しい野外活動



有 木 昭 久

◆自然が子どもを育てた——昔

私たちの子ども時代は、フキノトウが芽をだすと、春の訪れを心から喜び、陽気がよくなるに従って、外へ、足を一歩ずつ遠くに向けたものでした。

野に山に川に、子ども心にひかれていきました。二十四年前、今、私の住んでいる品川区にも、田があり、畑がありました。虫を追いかけたことは、今でも忘れられない思い出です。

あちら、こちらと、泥まみれになってはねまわり、季節の草花木の実をとったり、鬼ごっこ、かくれんぼ、開戦ドンな

ど、自然の地形を最大限に利用して遊びました。

そんなふうには育ってきただけでなく、その後も、自然とのつき合いが深かっただけに、今さらながら、自然が人間を育てることに感を深くします。

今や、どうでしょうか。

四季の移り変わりは、新聞やテレビで知ることが多く、自分の眼や肌で感じとることは少なくなりました。花屋の前にも、野菜や果物を通して、四季の感覚は狂いがちです。いつでも欲しいものが手にはいるような風潮は、いいことばかりとはいえません。

なんだか無理をして温室で作ることは、自然に対して、侮辱しているというか、破壊しているような感じを受けます。

地方においても、都市化が進んでいます。その地方独特のものを失なってはならないと思うのです。日本中どこへ行っても、平均的人間ばかりがふえてもつまらないことですし、今のような時代に個性的であることを、とても大切にしたいと思います。

人間は、自然とかげはなれては生きることができないことです。とくに子どもにとっては、おとながレジャーで山へ行くのとはちがった意味があります。

私たちが毎月一回、小学校一年生から六年生まで、合わせて五十名前後を山登りやハイキングにつれて行くのは、単なる体力づくりのためではありません。子どもにとって、自然は友であり、師ともいえるからです。

人間、土から生まれ土に帰る、ということを私は強く感じます。リーダーたちともよく話し合いを持つのですが、何かことばでいい表わせないが、自然にふれることによって、何か未知なるものとの出会いを感じる、ということなのです。

山の雄大さの中で、自己を感じるといふか、人間としての自分を再発見することは少なくありません。そしてこれは、テレビで自然にふれることで得られることではありません。自分の足で歩き、汗を流し、苦労することによって、はじめ

て得られるよろこびなのです。

「自然をこわしたものは、自然によってこわされ、自然を大切にすることは、自然に守られ、育てられる」、ますます破壊されていく自然を保護し、大切にすることが早く出てほしいものです。公害で日本は滅びるとまでいう人がいるのですから、早く手をうたなかったら、どうしようもなくなってしまうでしょう。

◆環境が子どもを弱くする——今

最近、家族づれで楽しむところに、△△ランドというのがあり大はやりです。うまく商業ベースにのせられて、遊んでいるのか、遊ばされているのかわかりかねる点もあります。

どこもかしこも同じつくりで、変わりばえしないのがその特徴です。車で簡単に行けるということ、そこでは自分で遊びを考えたり、自分たちで創るといふことが少ないかわりに、乗ったりすわったりすればそれですむわけです。

どの地域にも児童遊園地なるものがあります。外国やらのまねごとで、どこかがスカルプチュア等をつくると、それ

とばかりに、あちこちで、似たようなものがつくられます。これは遊び場をつくるというより、遊び場をおとなが奪っている、ことと同じです。

広い原っぱの方がよいと思っている子が、何人もいるのです。ただし、既成の遊具でしか遊べない子がふえているのが現状です。

子どもは、この過剰な時代に、自分で遊ぶことを忘れていきます。これはおとなの責任でしょう。ちょっとしたきっかけをつかまえて、子どもの遊びは発展していきます。

本来、遊びの名人である子どもに、遊びを教えるということは私たちとしては矛盾していると考えます。

しかし、今は、子どもが遊びを創りだす手伝いを私たちはしていかなければなりません。なぜなら、現在の子どもの環境は、子どもを弱くしているからです。

◆野外教育は可能性にみちている

現代の都会の子どもの特徴をいくつかひろってみますと、

一、情報社会の中で、選択する余地がなくなり、それに伴う

思考力の低下

二、公害、交通問題、遊び場の不足等、生活環境の悪化

三、創造的活動の減退

四、断片的知識の増大

五、労作教育の不足

などがあげられます。これらの否定的要素をのりこえていくには、何といっても野外活動以外にはないでしょう。

以下、具体的に野外活動の実例をいくつかとりあげます。

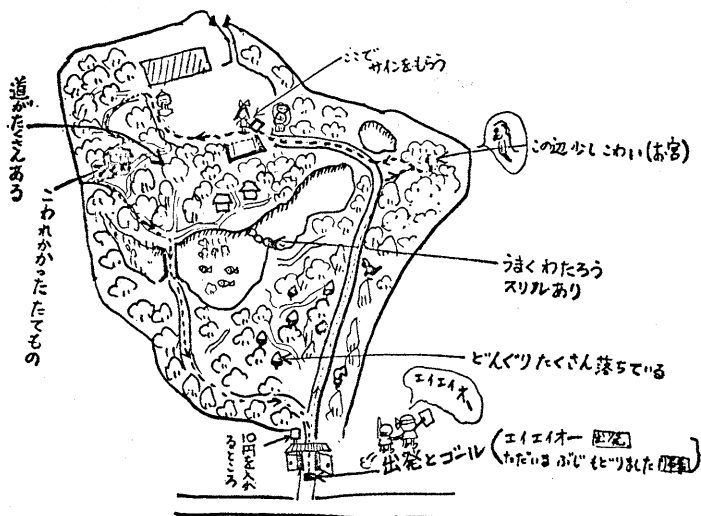
これを実施してみるに際しては、その園に合ったスタイルを創意工夫してみることに。現場の先生方が、いかに厳しい条件の中で、がんばってやっているかを知っているだけに、いにくいことですが、自分たちなりに再創造していただければと思います。(できるならその結果やようすを知らせてください)

地図は 略図ですので正確ではありませんが参考にして下さい。

▽忍者のきもだめし△年中・年長児

年中児と年長児、二人一組になり、全員がはちまきをし

忍者のきもだめし(根津美術館)



て、「えいえいおう」といって出発します。よく知っている公園でも、一度出発前に全員で実際にまわってみます。

途中には、しのび足、葉っぱ三枚ひろう、お宮のところでは誓いの言葉をいい、途中で先生からサインをもらい、帰っ

てきます。「ただいま、無事もどりました」といいます。

年齢の大きい子、小さい子といっしょに行くことは、子どもにとって大切な経験でもあり、子どもを知る上にも良いでしょう。

普段、勇ましそうな子が、逃げ腰だったり、弱そうに見える子が、元氣いっぱい、園の中でのようすとは違ったものが出たり、小さい子にしてみれば、大きい子との手のふれ合い、大きい子は、その子なりに面倒をみなければというー口で小さい子の面倒をみましようといったことなくーより具体的な場を持つことが必要です。

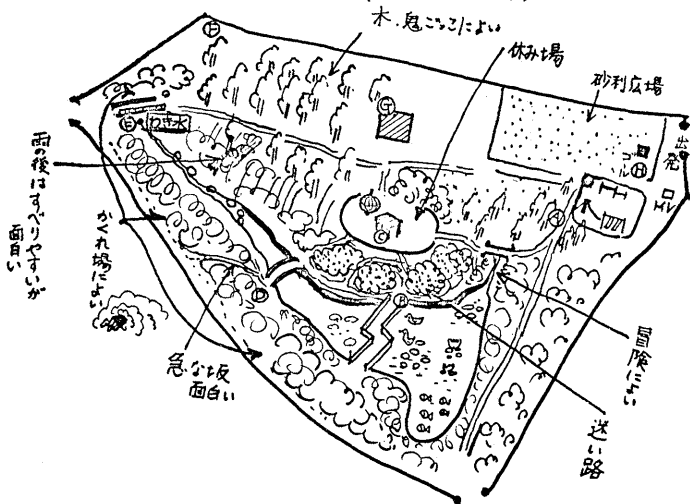
出発に際して、二人とはいわず、三、四人一組で一分おきに出発しても、四十人なら十分位で出発がすみます。

終わった後、探索するのも良いし、池の中にある石を渡るのもおもしろいと思います。

▽追跡あそび△ 年長児

これは先生を二名以上必要とします。まず一人の先生が全体の出発十五分位前に34ページの図の地点に指示文を置いてようすをうかがいます。指示文の内容は上に書いてある通りにします。子どもたちの良く知っている公園を使い、もし初

追跡あそび (有栖川公園)



- | |
|---------------------|
| このかたちをした「し」のちかくをさがせ |
|---------------------|

A地点において
 - | |
|----------|
| ふじたなよくみる |
|----------|

B地点において
 - | |
|----------|
| たいこばしあやし |
|----------|

C地点において
 - | |
|----------------|
| わきみすのちかくのきをさがせ |
|----------------|

D地点において
-

よって動きます。

「わあっ」と叫びながら一目散にかけて行くようすは爽快です。道に面していないものですから、子どもたちは、必死に近くをさがしまわります。この時は、まだひとりひとりが勝手に走りまわってかなり時間がかかります。A地点の指示文は上のようですが、このあたりから、もう、いつの間にかリーダーができて、君たちはこっち、ぼくたちはあっちをさがすからなど範囲をきめてさがし始めます。このようにして、だんだん要領がうまくなり早くみつれることができるようになります。そうなると、皆懸命です。七つの文を求めて走りまわりますが、高い所からようすを見てみると、一つの集団が、ありの子のように散って、また集団になり、しています。

めての場所なら一、二度散歩してから始めます。

もう一人の先生は、子どもたちの後についていき、指示は
いっさいしないことにします。

A地点だけは「遊園地近くをさがせ」という先生の指示に

などです。

ゴール目には「やあ、おながへっただらう。ごくろう。
よくがんばったぞ、さあ、ごはんにしよう」というぐあい

こになっている子どもたちも、きっと夢中になってやるでしょう。

▽歩け歩け△ 年長児

写真では、多摩川土手を歩いているところですが、二子玉川から多摩川巨人軍野球場まで約八キロの道のりを歩ききったものです。

この時は一月の寒い日でしたが、かえってふだんよりも皆元気でした。

寒い冬空のもとに外へ出すことは、とても大切なことです。条件の悪い中でやっていくということは、もちろん先生自身の細心な注意が必要ではありますが、勇気もそれ以上に望まれることです。

歩くこと、……特に都会の子どもたちは足腰が弱くなっています。爆発的、一時的なエネルギーはあるのですが、長続きしない点が、どうも気になります。原始的人間の行動をより多く行なうことが今一番大切なことです。それが人間回復の第一歩なのです。

野外活動の種々の効果はいくらでも考えられますが、せめて野外では、歩くことを目標とした活動が望まれます。

途中での子どものようすは、必ずしも歩くことだけに集中しているわけではありません。

虫をつかまえるもの、草花をつむもの、歌をうたうもの、バットをひろうもの、ビールびんのふたをひろうもの、先頭にいて、皆を待って、こっちだぞーと声をはり上げるもの、いろいろです。

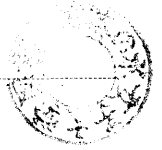
こんな楽しいことなら、子どもたちも歩くのがおっくうになるということはまずないでしょう。

今でもA君は、ひろったバットは、巨人軍が使ったものだと信じて持っています。

汚ないなどという概念は、おおよそ子どもにはあてはまらないものです。自然の中では、できるだけ大道具を持っていかず、自然にまかせていく配慮が必要でしょう。また、野外に行くときには、子どもの好きな小道具を持っていかせましょう。

(軍手、ビニール、ひも、小箱、新聞紙、鉛筆)
これらを各自、くふうしてリュックに入れていきましよう。

ゴールの野球場へきた時には、いつの間にか手にいろいろなものを持っています。



うらやましそうに見ているもの、自慢するものトレド交換を申し込むもの、なかなか愉快です。

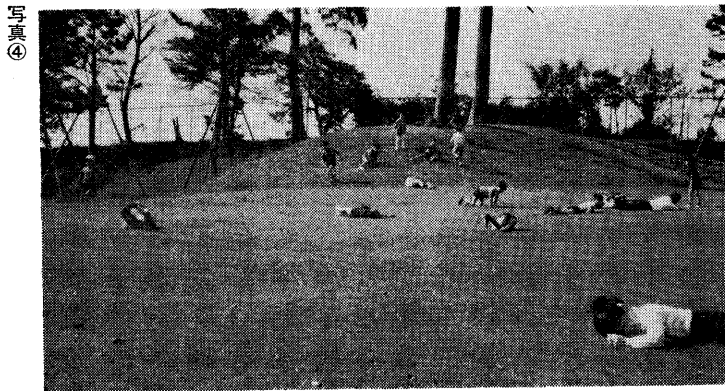
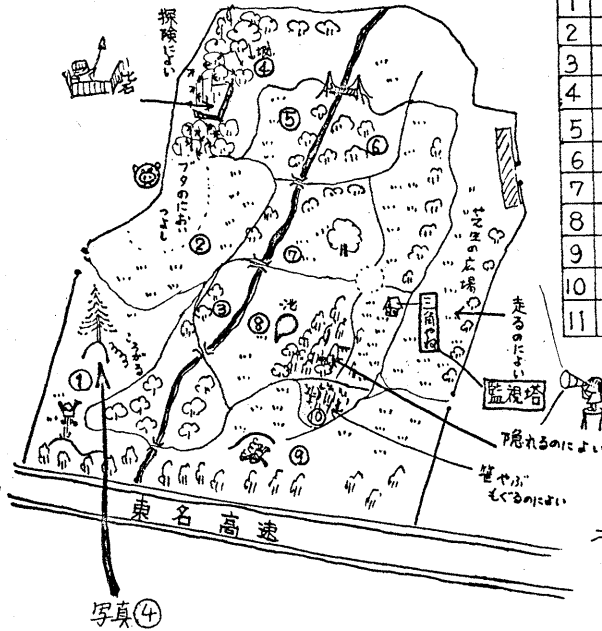
三歳児で二キロ、四歳児で三キロ、五歳児で四キロは、最低、野外に行った時には歩きたいものです。卒園時には五十

キロ走破の
記念カード
もあげられ
たらしいと
思います。
また公園
などに行っ
た場合は、
必ず一周し
てから行動
を開始しま
しょう。
▽宝さが
し△年長
児
砧ファミ

リーパーク三角屋根を本部にします。
皆の集合よりも三十分位前に設置班（二人くらい）が道に
よって区分された範囲の中に上図の旗を置き、それぞれに番
号をつけます。

宝さがし(砧ファミリパーク) 遊シル

1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		



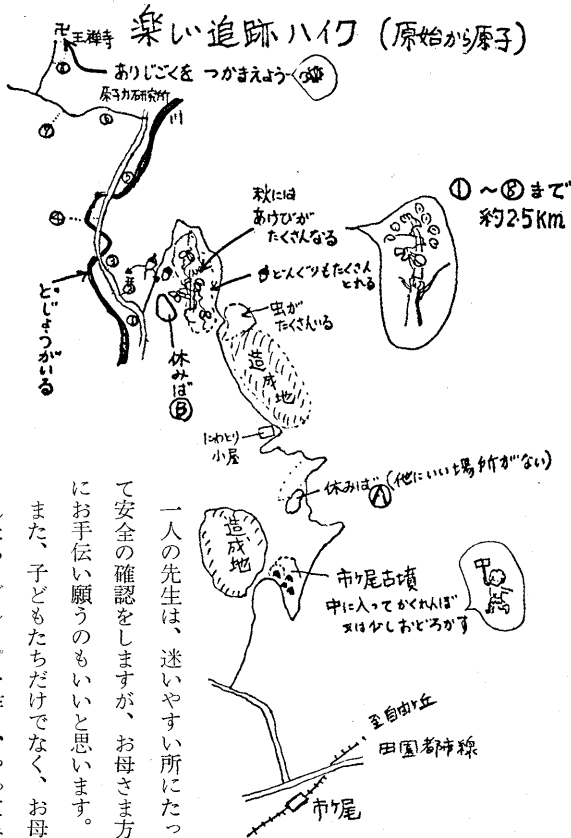
子どもたちを、三角屋根の下で、一班五人に編成し、シール、えんぴつ、カード、地図を持ってスタートの合図で一斉に、自分の好きな所からでかけます。出発は⑦からでも①からでも良いことにします。旗にはシールと、ひらがなが書いてあります。捜したらカードの番号に同じひらがなを書き、同じシールを貼ります。

こうして⑩まで完全に終えると「⑩」の場所がわかるということを前に説明しておきます。

答は「ほんぶにもどりなさい」となりわかったチームは大急ぎで帰ってきます。本部では帰ってきたチームに好きな封筒を選ばせます。中に「2より1つ多い数の番号の近くに宝あり」等という暗号を書いておきます。(おもしろい暗号を考えて下さい)

いよいよ宝がみつかるものですから皆は一目散です。

「あつたぞー、あつたぞー」嬉しそうな声が聞えてきます。「宝」は五十円



以内なら何でも好きなものを紙や袋に入れてくるように指示しておきますが、それぞれくふうして下さい。(ダイコンのきれはし(？)、トイレットペーパー、プラモデル、ちえのわ、おしゃぶり……)

監視塔からみると、子どもたちのようすが手にとるようになりわかります。行ったりきたり、同じ所をずっと捜しまわったりそれは愉快です。

一人の先生は、迷いやすい所になった安全の確認をしますが、お母さま方にお手伝い願うのもいいと思います。また、子どもたちだけでなく、お母さんたちもグループを作り、やってみ

るのも興味深いことです。母と子の楽しい野外活動になります。カードに正確に記入し、一番早く帰ってきたチームから順に昼食をし、その後表彰式を行ない賞状を渡します。

「あなたは、宝さがし大会において、すばらしい頭と足を使って、優秀なる成績をおさめたのでこれを賞する」……。

▽楽しい追跡ハイキング△

駅から、休み場までは全員で、ゆっくり、アケビや、クリ、ドングリをとったり、虫を追いかけたり、木によじのぼったり、のんびりハイキングをします。

洞窟の中に入ってかかれたり、途中では、自分の健康管理は自分でするという原則にたつて自由にお菓子などを食べさせます。

また同時に、このような長い距離の時には具合が悪くなったりして食事のできない子がでるかも知れませんが、そういう時のために、自分がぐあいの悪い時にも、これなら大丈夫という食物を入れて置くことが必要です。

休み場で食事をとった後、いよいよ追跡ハイクを始めます。食事の間に設置班が約二・五キロの道のりのどこかに矢印をつけて置きます。二人一組になりその矢印に従っていき

旗をみつけその記号をカードに記入します。

ただし途中には何の記号もない旗も作っておきます。④は田んぼの中、⑦はがけの下等とくふうして少し大変な所に置いたりします。

従来 of 遠足とはかなり違っているでしょうが、子どもたちはたいへん喜びます。

終点では、お寺の境台の下にいる、アリジゴクをつかまえます。時間があつたら、近くを全員で走りまわります。

▽歩くことが遊び△

都市化によって、ますます、子どもの体力が低下していくこと、すなわち、これは、人間が減びていくことに他ならぬと思うのです。

歩くのがめんどうくさい都会の子どもにとつて、楽しみながら歩くこと、あるいは歩くことが、こんなに楽しいことなんだと感じさせることが今必要なのです。

歩く場の拡張が今の子には必要であり、また歩かせることが楽しい遊びを生み出す源であると考えます。今の幼稚園に忘れ去られている問題が、どうもこの辺にありそうです。

(日本児童遊戯研究所)

手先の動きと子どもの感情⑧



清水エミ子

一、思いがけないつまずきを真けんにつたえ知らせてくれる手と指

子どもたちは、心の動きをすぐに行動に移す。この時、子どもたちは、子どもなりに目的を持って、その目的に対して予想どうか、予期というようなものを持って行動（活動）している。

その予想が、こわされた時、子どもたちは、失望し、失敗したと感ずる。

こんな失敗した時の手先の動きと、失敗の次にくる、手先の行動のちがいにおどろかされたのだ。失敗の次にくるきんちょうは、顔や体全体の表われとはおどろくほどちがっている。

例一 友だちの肩をたたいて呼んだ時、まちがえてしまった時の手先と、次に友だちを

呼ぶ時の手先（写真1〜4）

こうじは、スキップをしながら、室の片すみたち、男児の後から、その肩をかるくボンボンとたたきながら、「ひろやすくん」と声をかけた。肩をたたかれ、ひろやす、と呼ばれた男児はびつくりしてふり向いた。それはひろやすではなく、まさきだったのだ。

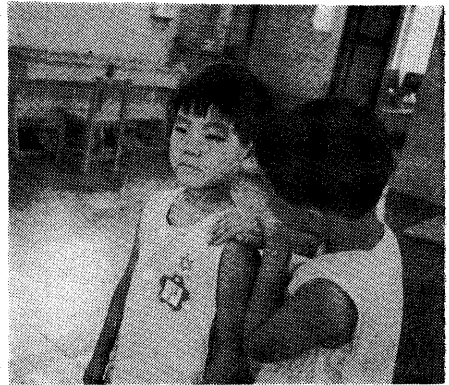
人ちがいがわかったしゅん間のこうじの手先は、まさきの肩の上で、何ともてれくさいやら失敗の失望やらの入りまじった表情をし、手のおき場のなさをうったえていた。

まさきが「ぼくまさきだよ」と話したのをきっかけに、こうじは「ちがっちゃった」だけいって、ひろやすをさがしてかけていってしまった。

ひろやすをみつつけてからのこうじの手先は、まず肩が上がった手がいっしゅん止まり、もう一度、ひろやすをかくにんしてから、手先全体に力をいれて、ひろやすの肩を、ぎんちなくみえるようにたたいていた。



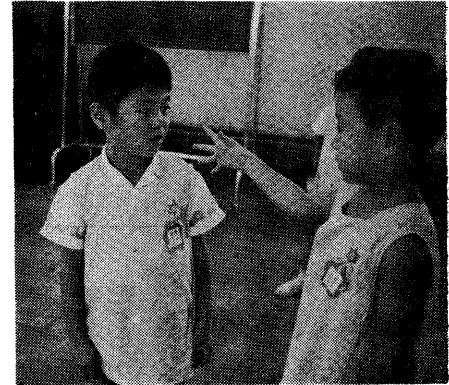
写 真 2



写 真 1



写 真 4



写 真 3

ひろやすが「なに、こうちゃん」といったのもしゅん間わからなかったように、きんちょうしていたのだ。一ぺんかくにんのためなのか指先を全部にぎってからのぼして肩をたたいいた。この動作は、かくにんの表われのようだった。こうじは、きんちょうしてたたいいたひろやすの肩の上の手先を、ひろやすの顔をのぞきこみ安心しながら、そのまま、肩の上で、きんちょうをゆるめて、ひろやすのくびにからませていった。そして、「ぼく、きみとまさきくんともちがえて、よんじやった」とくびをすくめていた。

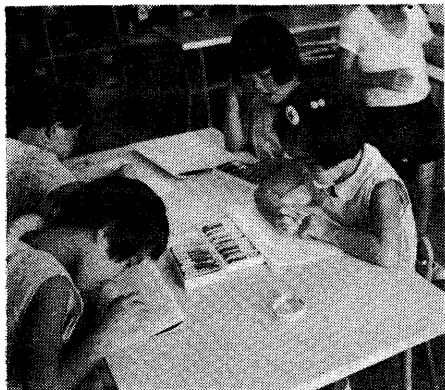
例2 自分の持物や教材(クレヨン)を取り

ちがえた時と、取りなおした時の指先

(写真5、6)

佳子は、数人の友だちと、自由画帳にたのしそうに、魚の絵を描いていた。

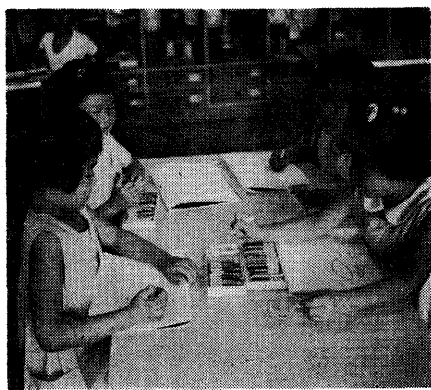
「魚の目は？」といしながら、手をのぼしてダイイ色のクレヨンを取りあげた。魚の目を描き入れようと画面にクレヨンをつけたしゅんか



写 真 6

あや子は無言で佳子が入れたダイタイ色のクレヨンを上からちよっとおさえてみるしぐさをしただけで、絵を描き出していた。

まわりに三名の友だちがいっしょに絵



写 真 5

ん、佳子の手先が、クレヨンをクルクルまわしてこまりはじめた。

「アッ、これ、あやちゃんのクレヨンだった、まちがえちゃったじゃない」とひとりでクレヨンをなぜながら顔を赤らめて、あや子のクレヨン入れにかえた。

をかいていたが、佳子のこのまちがいをとがめる者はひとりもいなかった。ただ、そうかというようにちよっと描く手を止めただけだった。にもかかわらず、佳子は次から、自分のクレヨンの色をかえて描こうとする時、すごいきんちようでクレヨンをたしかめて描いていた。

クレヨンを、クルクルとまわして、自分の名前をたしかめてから画面にうつしていた。そのクレヨンをつかむ指先には、すごい力が入っているのだ。また取りちがってはいけない、ときんちようしている。一枚の絵を描き終わるまでそのきんちようはつづいていた。その時の顔や体全体での表われを見るとそれほどきんちよう感を感じられないのだが、指先は力がこめられきんちようしていた。

例3 水道の栓をひねりすぎて、水が出すぎてしまった時の指先 (写真7、8)

ボールでサッカーごっこをしていた達夫は、手のよこれが気になり、水道のところにいった。

何の気なしに水道の栓をひねったようだったが、しゅん間、思いがけずたくさんの水がジャッポと出すぎてしまった。はねる水しぶきに、あとずさりしながら、右の手先は水道の栓をわしづかみにして上からおさえているだけだった。

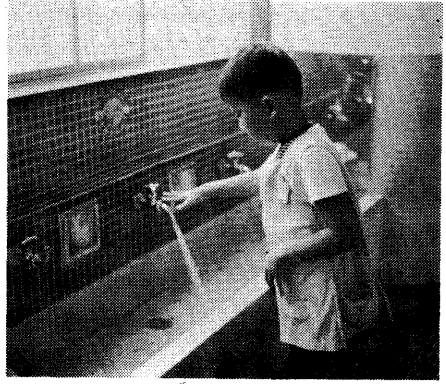


写真 7

とびのいて、間を

おいてわれにかえつてからの達夫は、

・一度水道を止めてしまった。その次に指の先端をつかって

(親指・人さし指・中指の三本) そろそ

ろ水の出をみつめながら、注意ぶかく水道の栓をひねりはじ

めた。

水道のじゃ口のをぞきこむようにゆっ

くりとかくにんしながら栓をひねっている。適当な水の量が

出て来た時、達夫は三本の指を、ちよっ

と持ち上げてから、大きなためいきをつ

いていた。

ためいきをついた後にやっと達夫はひとりでっこりし、手を合わせてせっけんでたんねんに洗いはじめたのだ。このようすをみて達夫の心が指先から手にとるようになったわってくるのだ。思わず出しすぎた水道の失敗から次は失敗しまいとする指先のきんちょうがすごいのだ。またやってしまったってという心がしゅん間指をきんちょうさせているようだ。

例 4 持ったつもりの物を、おとししてしまった時

(写真9、10)

積木あそびをしていた(すすむ)は近くにいた、友だちののぼるに「ねえのぼるくん、三角とつてよ」とたのんだ。たのまれたのぼるは、ことばで答える前に三角の積木を取り上げたのだが、三角の積木を、つるつと、手からぬけて落としてしまった。

落ちると思っていなかった積木が落ちてしまったしゅん間、のぼるの手先は、右の手が耳のよこにふり上げられ、ぎゅつとにぎりしめられた。左手先はズボンのスソをぎゅつとにぎっていた。

そして、次には、両手の指をそろえてこわばらせ、おちた三角の積木をぎゅつとつかんで、すすむのところを持って行って、手わたしていた。その時の手先は、手の平も、指先も全部に力が入って、ぎごちなくきんちょうを表わしていた。

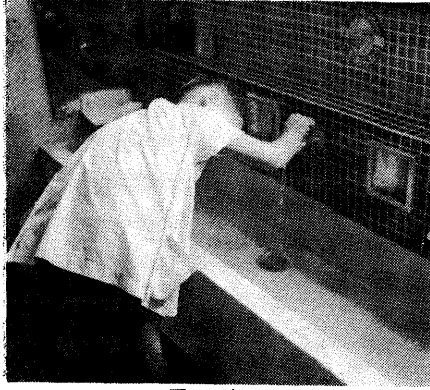


写真 8



写真 9

この時も顔や動作は、それほどぎこちなさは感じないのだが、手先は全く力が入りすぎて棒きれのようにぎこちないだ。

のぼるはこのあと、自分の手が何かぎこちないものように感じるのか、自分でもあましているように手を動かしつつづけていた。そしてホールをしばらくぶらぶらしてから右手指を口を持っていった。（この動作はぐうぜんだったかも知れない？）

このようすのすぐ後、女兒のじゅん子が、うがいのコップを落とす。落としたコップをひろい上げる時の指先も、のぼるの積木の時と全く同じように、小さな片手でひろえるうがいコップに両手をきんちようさせて近づけて取り上げた。そして取り上げる途中は右手片方でひろい上げてはいたのだが、コップの取手に、指をかけて水をくむときの人指し指など、カチンカチンにきんちようしていた。

保育者が、指にちょっとでもふれたらボキンと、音がするのではないかと思うほどだった。

例5 ぼたんをとめる時、ボタン穴をまちがえているのに気付いた時（写真11、13）

おいかけごっこをしてあそんでいた真太郎が、遊び終わって、上衣を着に室にかけ込んで来た。近くでねん土をしていたみえ子に何か話しかけながら、気らくにボタンをとめはじめた。二個、三個、とめた時、「あれ、これはいけない」と真太郎は、ボタンがかげちがっているのに気付いたのだ。ハッとわれにかえた時の真太郎は、顔を真赤にして指先に力を入れて、はずしはじめた。

気があせると同時に、指先がびっくりしてきんちようし、こちこちになって、なかなかはずせなくなっている。



写真 11

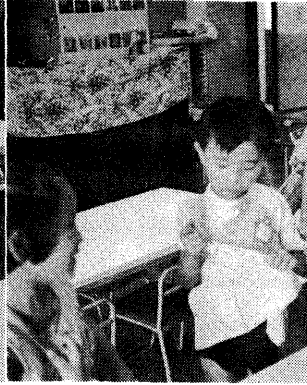


写真 12

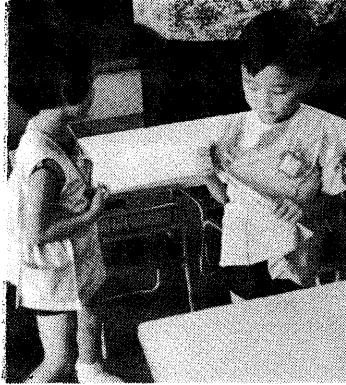


写真 13

そのようすをみえ
子は、「なにやって
んのよ。ゆっくり、

よくみなさいよ、あ
わてないで」と真太
郎をみつめ、ボタン
をはずしてあげよう
とした。

「いいの、いいか
らいいから」といい
ながら声や顔は、少
しテレているかなど
思う程度にしか見え
なかったが、指先や
手の平は、ますます
きんちょうしてしま
い動きが止まってし
まったのではないか
と思われるような表
われをしているの
だ。とうとう真太郎

は、たまりかねてしまい、ボタンから手をはなし、上衣のすその
左右を、わしづかみにし左右にひっぱり上げて、むりにはずして
しまったのだ。

はずし終わってから真太郎は、すぐには指がいうことをきかな
いたために、上衣の前をはずしっぱなしで、みえ子たちのねん土を
しばらく見ていた。そして、自分で安定を取りもどしてから、ゆ
っくりとボタンをはめていたのだ。

真太郎の指をみつめていると、思いがけないことがら（失敗）
に対しての指は、本人が意識していないほど、びん感に、失敗を
みとめてしまい、すなおにとまどい、次への答えを指自身がみつ
けようと努力していることがわかる。

ボタンの穴をまちがえただけで、これほど指先がこうちよくし
てしまうものだろうか、と子どもの指をのぞき込んでしまう。

まちがえてボタンはめちゃったら、
はずれなくなっちゃった。

ボタンがおこったのかなあ。

ぼくの手が（指）そっちにつれてったんだものねえ。

そのつぎやりなおしたけど、

まだおこってなかなかはまらなかったの。

いつもすぐはまるのにね。

ボタンでおこりんぼだね。

しんたろう

しばらく休んだ後、ボタンをはめなおしてから、ひとりごどのようにつぶやいた真太郎のことばなのだ。

気らくにやった行動が、思いがけず失敗してしまった時、特に、指先や手をつかかってやった行動は、しゅん間的に指が反応することがわかったのだ。

例6 絵本を二枚いっしょにめくってしまった時(写真14)

マゴトコーナーで、三、四名の女児がひとりひとり一さつずつ絵本をひざの上のせて見あっていた。

一頁ずつ、思い思いのことを話したり、字をひろいよみしたり、わざわざ友だちの絵本をさかさからのぞき込んで、いろいろのものに見立てて、ふざけたり、よろこんだり想像をたのしんだりしていた。そのうちに、頁を「いちにのさん」でめくることをたのしみ出した。

「そのつぎよ、はい、いち、にいのさん」とめくった時、やす子が「あっ、まって、しっぱい、二枚いっしょになっちゃったー」と大声で友だちにストップをかけた。

おどけたふんい気がいっしゅんストップしたその時、やす子の指はものすごくあせて、たった二枚の紙が一枚にはがれないのだ。

指がこわばってし

まって、今までのように、なめらかに頁をくっていくことができなくなつたのだ。

その後、やす子は、二、三回スムーズに頁をめくると、また、つまずいて二

枚、三枚、いっしょにめくってしまい「アツ、また、まって」といったり、「この本みんなくつついてだめ、とりかえるからまってね」と本をかえたりした。しかし、めくる手や指は、だんだん重くなり、スピードがおちてしまい、みんなのあとから、やつついていくじょうたいになって、あせればあせるほど、つまずいてしまっている。

「やす子ちゃん、はやく。つままないや、のろいんだもの」といわれればいわれるほど、指はかたくつっぱってしまい、親指と人さし指のつけ根の方で、ぶきつちよに頁をかくにんしているのだ。

つまずかずに、スムーズに、頁がめくれていた時は、指先が、



写真 14

かるく本の上にふれ、リズムカルに頁をめくっていたのだ。

失敗と同時に、指のおくのほうで頁をめくるようになっていたのにおどろいた。だんだんきんちょうし、指のじゅうなん性がなくなり棒きれのようにこうちよくしてしまっただのだ。

そして全身につかれがでてきて、やす子はハートつためいきをつけて絵本をほうりなげて、「ヤーめた、つまらない」とママゴトコーナーにねそべってしまったのだ。

このようにいくつかの事例をながめていると、今まで保育者が見つめていた、子どもたちの見つめ方が、いかに不確かで大きっぱであったかに気付くのだ。

子どもたちが思いがけない失敗に出あった時の体全体での表情は、しゅん間、びっくりしたり、とまどったりはするが、その程度は、まったく表面的で、本当の心の状態はわかりにくい。それは、極度に失敗感を感じると泣き出すとか、そのことから遠のいてしまつて、近よううとしなくなるからなのだ。

ボタンをかけちがつたり、友だちを呼びちがつたり、水道の栓をひねりすぎたり、絵本を二枚いっぺんにめくってしまったり、など、まわりの友だちや、おとな（保育者）など、あまり気にとめない、かえってかゝるい話題になつたりする、などと感じやすいことがらの失敗が、これほど、子どもたちの心に、ひびいているのだ。しゅん間のきんちょうはいうまでもないが、その後のやり

なおしの時にみせる、指先の、手のきんちょうは、見のがしてはいけない大切な表われである。

子ども自身は、気づくにやろうと思つているのかもしれない。しかし心のおくでは、かるい失敗も、次に失敗すまいとする大きなきんちょうになっているのだ。失敗の時、失敗の次に来る子どもたちの表われを、見まちがわれないようにしなければならぬ。

（顔や体全体は、見せかけやその一部分しかわからない）

失敗の次に来る指先のきんちょうと、その解消のしかたを見つめることによって、その子ども、ひとりひとりの心の動きや表情をまちがえなく知つて、むりなく次の活動に移していく指導の手だて、手がかりをつかむことができると思ふ。

どんな時に、どのような表情をするか、そして指先は、どうつたえているのかを見つめ、ひとりひとりが生活に自信とよろこびを持つて前進してゆけるように見つめ、助言するのに、もつともつと、いろいろな場での、子どもたちの、指先や手の反応を見つめなくてはと思ふ。

失敗、つまずきのだんかいかのきんちょうとまどいから、次への活動の安定をどう持たせ、保たせ、ゆたかな発見と、創造（想像も含む）を体験させたらよいのか、子どもたちの真のうったえをあらゆる場と時と所で、正しくつかんでいかなければと考える。

ヨーロッパの旅 (九)

人気のほとんどないラムブイエの宮殿で、ひとときの静寂を味わつてから、更に車を南へと走らせて、シャルトルという町に行く。この町にある寺院のステンドグラスが美しいということ、すでに午後の日射しが傾いてはいたが、一時閑余りの行程を、この町までやってきたのであった。

寺院は、その正面が西日をいっぱい受け、黄色味を帯びた輝きを見せながら、そそり立っていた。その前が広場になっており、何本かの木が植えられてあったが、一、二組の家族連れの子女がそこを横切っただけで、ここにもまた、静寂が漂っていた。

寺院の玄関に向かって左側のところに、着飾った老年の婦人が、台を前にして坐り、レースを編んでいる。頭にのせた白い帽子もそのレースで編んだものであり、黒い布地に白や赤のひだをつけたその部分も、レースであった。それはこの土地のコスチュームであり、人の目をひきつけるものがあった。商売が目的で、

平井信義



そうした衣裳を身につけて編みものをしているのであるが、その前に立つ人もなく、三人はおしゃべりをしながら、時々顔を見合わせては笑っていた。私とその光景を眺めているのを、ちらつと見ることもあるが、私に誘いかけるでもなく、編みながらおしゃべりを楽しんでいるといった風情であり、やがて暮れかかる時を少しも惜しんではいない趣きがあった。

寺院に入る。西側の高みにあるステンドグラスは、まさに入陽を正面からうけて、赤に緑に黄色に、濃い陰影をつけて、絵柄を浮き出していた。それは、キリストにまつわる物語りを描いたものであるという。私はしばらくそれに見とれていた。やがて、それに背を向けて、祭壇の方をのぞむと、御堂の半ばから祭壇に近くまで、ステンドグラスを通してくる光が斜めに射しかけていたが、その光を避けるようにして祭壇にむけてひざまずき、お祈り続けている六、七人の人たちがいた。私の方に背をむけている

ので、その年齢ははっきりわからないけれども、老いた人あり、若い人あり、男あり、女あり——という具合に、机の上に指を組んで、祈りの言葉をつぶやいていた。それはすでに長い間続いているのであろうか、私どもがその中にいるあいだも、同じ姿勢でみじろぎもしなかった。

寺院を出ると、裏手にある広場の木立ちの中へとまわっていった。そこは、寺院の蔭になって、すでにうす暗くなっていたが、東のはじめに石垣が積まれ、その下はけわしい崖になっていた。目の下の谷間を越して目の前にひろがる丘には、白い壁の家並が段を作りながら、夕日をいっぱいを受けて並んでいた。一軒一軒が、緑も濃い木々の間から、手にとるように見えた。それらの家は小じんまりとしたものであり、おそらくはあまりゆたかでない人々の住いのように思えた。

ヨーロッパに来てしばしば出会うのは、このような寺院とか宮殿のすぐ裏手に、スラム街があるということである。そこにある家々の壁はうすよごれていたり朽ちたりして、戸口も狭いものが多い。その中から、裸足のまま子どもが飛び出してくることもあり、戸口に坐って新聞紙につつんだら焼のような菓子なめるようにして食べていた子どもの姿をみたこともある。あるいは、小さい戸口のいくつも並んで道の石畳の上で、かけごとをして遊んでいる子どもたちを見たこともある。その子どもたちの衣類はうすよごれたり、破けたりしていた。あるいは、家の近くの朽

ちた壁に、いかがわしい絵が描いてあり、その下にいく筋かの小便の流れたあとがついていることもあった。

そのような光景を見るたびに、そしてそれを思い起こすたびに、どうしてこのような場所にスラム街ができるのであろうか、また、その福祉を向上させるために、どうしてもっと努力をしないのであろうかと、考えざるを得なかった。

しかし、このシャルトルの町並からは、その印象を受けなかった。それが、今でも、この寺院とその界限を美しく思い出させてくれるゆえんかも知れない。

ふと見ると、崖の上に積まれた石垣のちょうど中頃に、若い男が抱き合っている姿が目にとまった。その石垣には男が自分の背をもたせ、女の子の背をかかえ込むようにしていたが、女の子の方は背伸びをするような格好で、両腕を男の首にしっかりと巻きつけていた。男の口もととおおいかぶさるように女の口もとをふさぎ、二人は身じろぎもしなかった。それはわれわれが石垣に近づき、しばらく町並を眺め下ろしたり、寺院の高みを梢の間から仰いだりしているあいだじゅう、そしてその広場から立ち去るまで、続いていた。それは、まさに一幅の画であった。

その晩、バリーの研究所ですでに十五年の研究生活を送っている地質学者と、留学が二年目になる物理学者夫妻と、コニャックの味を口にふくみながら、深更まで話し合った。

「いったい、どうしてあんなに人目のつくところで、男と女がい

「ちゃついているのだろう」と、物理学者が言った。彼自身も激しい恋愛をへて結婚した人であった。「何か、人に見てもらわれないと、損しているような気になっているのじゃないかしら？」

「日本でも、近頃は同じような現象にうつり変わってきているのではないですか？ 全体がそのように変わっていると、それが当たり前になって、特別に意識しなくなることも考えられますね」と、地質学者が応じた。

「しかし、何もわざわざあんなところで抱き合わなくなったって、もつと情緒的な場所があるでしょうにね。ぼくら東洋人には、少なくとも僕なんかには、まねのできないことだ」

「ぼくもパリに来た頃にはそれが気になったものですが、今では全く特別な感じ方をしなくなりましたね。根本的に考えて、そのような行動の型が、人間としてどのような意味をもつか、ぼくにはよくわからないことですが……」

「何か、動物的——って感じだな」

「それも、やはり感じ方のちがいがあるとも言えますよ」

少なくとも西洋の文化が入ってくるまでのわが国では、男女のつき合い方に「奥ゆかしい」ものがあり、それを尊んだ。思いを歌や詩に託して表現するという文化的な方法が用いられてもいた。それが、今や皮ふの感覚を通しての直接的な刺激を求める形で表現され、しかも人目をばからない状態にまでなっている。文化が、そしてそれを支えている人間の精神構造が、次第に、

皮ふ関係に頼るといった小児的な段階に退行しているのであるか。今後において、わが国の男女関係の表現が、西欧化してしまふと共に幼稚化するのだろうか？ 私自身はどうであろう？

「数年前、家内といっしょにヨーロッパで三カ月過ごした時に、いつの間にか、町を歩く時にはお互いに腕を組むようになっていたのですよ。それまでは、東京の町の中を二人で腕を組んで歩くようなことは、はずかしくてできなかった。しかし、こちらに来て、年をとった人たちまで、夫婦と限らず男女が歩いている時には、腕を組んでいる。そのような環境の中にいるうちに、腕を組んで歩かないことのほうが妙になってきたのです。腕を組まない、何だか、けんかをして歩いているような気分になるのですね。変なものだなあ——」と私が言った。

「東京に帰ってから、腕を組んで歩いておられますか？」

「やはり、日中はどうも具合が悪いように思えてくるのです。家内の方が積極的で、腕をさし入れてくるのですが、ぼくは、何となく、くすぐったいような気がしてしまうのです。でも、夜など、人目につかないところでは、腕を組みますが……」

「まあ、おあついこと」と物理学者夫人がはじめて口をひらいたので、みんなが笑い出してしまった。

そこで話は別の方に向けられた。フランスの学者があまり勉強をせず、学閥と要領とに頼っている面があり、わが国の学者の勉強ぶりがいかにすぐれているか——ということを地質学者が言い

出した。

「それなのに、どうして、欧米の文献をあさってはそれを追っていくような学者の方が、日本では尊重されるのでしょうか？」

ユニークな研究をしている人でも、それが外国文で発表され、こちらの人の目にとまり、こちらの人が高く評価しはじめると、あわてて日本でも評価をし直すということがよくあるのは、本当に残念な気がします」

「それは、欧米崇拜の思想がまだまだ強く残っており、島国の中で威張っている田舎者の気持でいるからじゃないかな」

「それもそうだけれど、本当にじっくりと一つのことには打ち込んでいる人がいないために、打ち込んでいる人のすぐれた研究の価値がよくわからない人が多いからだと思いますよ」

「一つのことには打ち込めないような学界のムードは感じますね」
「外国にきていると、世の中のわずらわしいことにタッチしないでもすむ点で、研究に打ち込める——ということをしみじみ思えますね」

「日本にいと、雑事に引っぱり出されることが多すぎますね。どうしてそういうことになるのだろうか」

このような会話が、二人の学者の間で交わされているのをききながら、私自身、打ち込む余裕のなかった研究生活がしみじみ思い返された。

「ヴァカンスをたっぷりとるけれど、あれも、役に立っている

のではないのでしょうか？」

夏のパリイは、パリージェンスがほとんどいなくなる季節である、きいている。みんなが、それぞれ計画していた旅先へとでかけていくからである。

「ヴァカンスの送り方は、人によってそれぞれちがうだろうが、こちらのすぐれた学者は、思索の時に使っていますね。専門以外の本、特に文学書とか哲学書を読んでいる。この点も、日本の学者とちがう点じゃないかしら。日本のヴァカンスは少ないし、その間でも専門の本を読んだり、専門のことを書いたりしている。それだけ商売熱心ということになるでしょうが、思想のある学者にはなれないでしょうね。だから、話の中に味わいのある人が少ないと思うがどうでしょう」

このことは、私の留学中にもしばしば経験したことである。私の先生のベンホルト・トムセン教授もアスベルガー教授も、小児科医ではあるが、ヴァカンスには、分厚い哲学書とか小説、戯曲などを読んでおられた。そして、その内容についていろいろと私に話して下さった。

現在でもなお、年に一〜二回、自分が読んで感激したという本を、送ってくださる。それらの多くが、大部のものである。私には、ある時には目次に目を通すだけに終わったり、読みかけて放棄してしまったりで、なかなか思うように完読できない。先生からの次の手紙には、感想はどうだったかなどと質問してくるこ

がしばしばであったが、多くは、まだ読み通していないから——といった情ない返事になってしまっている。留学当時を思い出してみて、私の二人の先生とのふだんの話の中でも、人生観にふれるような言葉がたびたび出てきて、心を打たれるのは、やはり長いヴァカンスをゆつくりと思索に費しておられることによるものにはちがいない。わが国の小児科医からは汲み取ることのできないような風格があるのもそのためであろうか？

「しかし、若い連中には、そうした傾向が次第に少なくなつて、目先の実利的な面だけを追究したり、遊んだ方が得だ——といった暮し方をしている者が多くなつていと思うが、どうだろう」と、物理学者。

「私の研究所でも、たしかにそのことで言えますが、終局的に言えば、人によりけりというところではないですか」と地質学者。

「あまり長くこちらで生活していますと、日本との比較ということができにくくなつてしまいますね。特に、人間の課題となると、似たりよつたりで、いい人もあれば悪い人もあり、すぐれた仕事を目立たないでしている人もあり、大した仕事をしてもないのに威張っている人もあり——というふうには……」

十一階にあるその部屋は、天に高く突き出ている細長い建物であったが、闇につつまれ、周囲のもの音から隔絶されると、ちょうど一階の応接間にいるような感じがした。

「ちょっと、窓から外をみてごらんになりませんか？　ちょうど

斜め左に、エッフェル塔の光がみえますわよ」と、夫人がいった。

私は、コニヤックの香りと味とに、すでにほろ酔う状態のまま、窓をくぐり抜けてテラスに出た。真暗闇の中、そして目の前に、縦横無数の四角い窓が電灯の光に輝いている。ここは、パリ—の南にあるパッシーという巨大な団地であり、古いパリ—とは全く趣きを異にして、縦と横、あるいは斜めに、巨大な建物が続いていて、夜の窓の灯は、その家庭家庭を象徴するように輝いていて、そこに人影がみえなくとも、そこから家庭のふんい気が洩れてくるような感じさえする。私は、このような夜景をみるのが好きである。私をいたわるようにしてでてきた夫人が、

「ほら、あそこに点滅している光が、エッフェル塔ですよ。

ごらんになれるかしら、ほら、今、光った」

はじめの時は、その光が私の目には入ってこなかったが、「ほらまた光った」と、二度三度言われているうちに視点が定まり、ちらつと光る灯をとらえた。

「今、光った、あれでしょ」「そうです、そうです」

二人は、手すりに身を託しながら、しばらく夜風に吹かれていた。それは、音もなく頬をかすめて通り抜けていった。大きな闇、そして、窓をいろいろる光、そして、遙か遠くに点滅しているエッフェル塔の光——それをじっと眺めているうちに、ふと、やはり、自分は今、日本の裏側の地球にいるのだなあ——と思われしてきた。

ちえおくれの幼児と幼稚園

横 木 ス マ 子

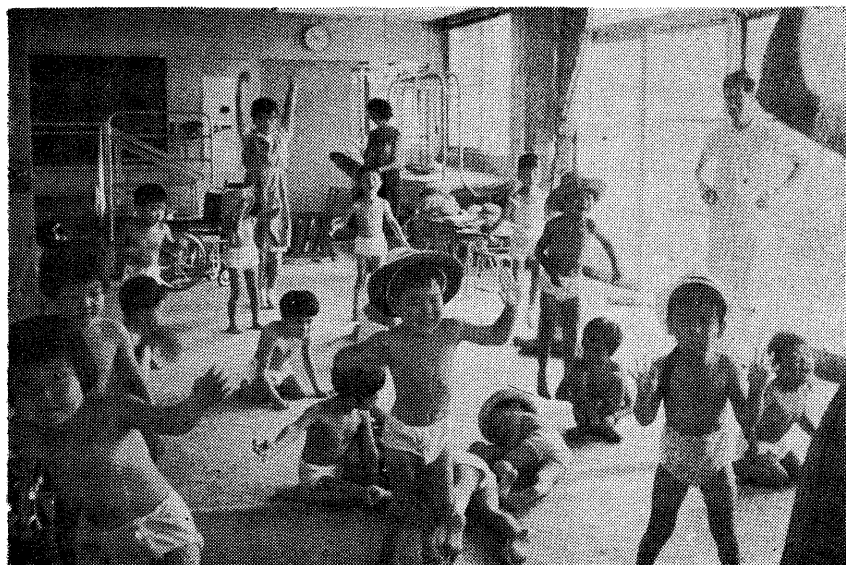
普通児または、それ以上の知能の高い幼児を対象とする私どもの幼稚園に、はじめて知恵おくれのA子と自閉的傾向のあるBが入園して来たのは、一昨年のことである。その子どもたちの入った組の担任を仰せつかった私は、正直なところ最初は途方にくれてしまった。しかし以前から心身障害児教育に関心を持っていた私には、A子とBを受持つことによって、それが幸いともいえる意欲に満ちた日々になっていった。

昨今、一般的に一年保育は、やや軽視される傾向があるが、私どもの幼稚園では園長、主事をはじめ職員が皆一年保育の捨て難い良さを認め、また必要性を感じている数少ない幼稚園ではないかと思われる。現に私どもの園でも一年保育は募集の定員に満たないことが多い。A子とBが入園したのも、応募者全員を受け入れたからである。A子もBも健康に恵まれ、いわゆる中間児でそ

の二人を含めた二十四名の保育がはじまった。以後は子どもたちと、手探りの保育者との生活の実践例と、それなりに、その場から生み出された一つの考えである。

※ 一学期

入園当初の期待と不安に満ちた子どもたちに、安定感を持たせるべく配慮をつねに念頭におきながら、私はまずA子とBの席を一斉保育をしなければならぬ関係上、担任にもっとも近い場所に決め、二列に並ぶ時も二人を最前列にしてつねに接触しA子とBを理解しようと努めた。同時に母親との連絡を密にして、集団の場と家庭との両面からA子自身、B自身をよく知りたいと思う。また他の子どもたちと、どのようにとけ込ませていくかということに担任として協力しようと思った。



写真(←) 身障者福祉センターにて 体操の時間

(A子) 五人家族、三人姉妹の末子で二人の姉も私どもの幼稚園を卒業している。軽いちえおくれから来た言語障害があり、週に二日市の身障者福祉センターへ通い、幼稚園には週四日の登園。母親への依存が強く甘えっ子である。母親は賢明な態度で担任とも積極的に協力し二人の姉たちにも協力をよびかけ、そのためにA子は明るく優しく素直に育っている。几帳面すぎる面もあるが、基本的な生活習慣を身につけている。

しかし話すことに困難の伴うA子にとって集団生活は強い抵抗があり、むかえに来た母親の手を握る強さで母親はそれを感じとったという。しかし「食後のデザートのパナナも姉たちの分までは、どんなに欲しくても狙わなくなりました。朝の洗顔も姉たちの後にちゃんと並んで待つようになり、幼稚園に入ってから急に成長して身障者福祉センターでもその結果が表われ、訓練を受ける態度が変わって来たそうです」との、うれしい報告が聞かれるようになり、幼稚園でもだんだん担任の手を離れてお姉さん気どりの女兒たちに手を引かれ、楽しそうに砂場あそびや、ままごとで、参加とはいかないまでも、友だちのすることを見て満足しているようすであった。

(B) 六人家族、兄弟弟が一人ずついる。母親はBを理解できず苦しんでいたのだろう。担任とあまり話そうとしなかった。

それどころか会うと「家ではいつも静かに地図をかいたり数字を書き遊んでいるのに」と、自閉的傾向をむしろ賞賛し、園での同じ言葉を繰り返したとなったり多動的行動は心外だといわんばかりであった。母親と担任のそうした会話の翌日から、Bはますます荒れはじめ、その頃「何とかしなくては」と、意気込んでいた私は、すっかり自信を失なってしまった。

担任と視線を合わせることもなく、語りかけても全く関係のない言葉を繰り返す。珍しく手をつなぎに来てくれたと喜んだのも



写真(1) 身障者福祉センターにて
A子(左より二人目) 43年10月

束の間、その握った私の手で自分の鼻をふき汗を拭う。この時のBにとって私の手はハンカチに等しかったのだろう。しかし絵画製作の場においてBはいきいきとし、驚くほどの能力を発揮した。
(組内の幼児たち) 彼らも四月は各自が自分のことで精いっぱいである。しかし一学期も半ばを過ぎる頃には、A子とBについて「何だかようすが変だ」という程度には感じていたようすも見えたが、具体的には表われてこなかった。

(担任) 担任である私はいえ、ちえおくれ、自閉症にっいてはテレビ週刊誌的知識しかなかった。その結果、なぜA子は自分の要求を、目(泣くことも含む)だけで訴えようとするのか。なぜBは椅子に腰かけられないのか、また他人の物も自分の物も区別なく、欲しい物を友だちから取り上げるのか、察しはつくが理解に苦しんだ。そのために今考えると不適当な処置も多かったのではないかと反省している。

※ 反省と努力の夏休み

失敗と努力、努力と喜び。子どもたちにとっても担任にとっても、新しい経験の一学期は、母の日、父の日、遠足、夏の水あそび、



写真(2) 幼稚園にて 44年2月
お店ごっこをするA子(右端)

学期末保育参観日と、日を追い行事を追って、あつという間に過ぎてしまった。

私は一学期間、何をしたのだろう。とにかく勉強しなくてはと、夏休みを大切に使うことを心に決めた。まずA子の通っている身障者福祉センターを訪問し、担当の先生と経過、今後の配慮について話し合った。また言語障害児教育講習会へ出席したが、これは初心者向きであって私ほもつと、より深く勉強したいという意欲をかきたてられた。その頃、ある小児療育センターで募集していたボランティアの仲間に入り、心身の障害についてひとつずつ専門の先生から、実際に則した指導をいただく機会を得た（ここではBを中心に学ぶ）。

全体を通して夏休み中に学んだことは、障害児に対し特別な配慮はなされても、扱いは決して特別なことをするのではなく、普通児と同じように行なうということである。本質的には同じ人間の幼児であって特別なものだと考えることがおかしいのだという、しごく平凡なことであった。

※ 一学期

子どもたちは心身ともに一段とたくましくなった。一名男児が転居のために退園したが、すぐにロンドンから帰国したばかりの

U（彼は普通児ではあるが日本語が全くできなかった）が編入園し、人数の上では二十四名に変わりなく保育が始まった。

実践例 一 九月十二日 貼紙製作

形式からいえば一斉保育で、仕事のすんだ子どもたちは、他の組の先生が庭に出ていれば戸外の自由あそびに出し、A子、B、Uは個人指導をするという一学期と大して変わりばえのするものではなかった。戸外の子どもたちには担任としてすまない気持はあったが、A子、B、Uは三人三様の話し方をしながら、実に楽しそうに仕事をするようになった。三人がだいたいその仕事の意図をのみこんだ頃、一遊びした女児三人が何となく入ってきて声をかける。

女児たち「まだやってんの？ おそいわねー。あたしたちとっくにすんだのよ。ねえ」

A子「きれーにやってんだもん」と、本人はすましているが、どうみてもきれいだとは思えないというように、子どもたちはちらっと私の顔をのぞくように見る。

担任「いっしょうけんめいにやってるのよ。ほら、ここの色なんかきれいでしょ」

女児たち「そうね、ほんと。A子ちゃんがんばって」と、頭をなでてくれる子どももさえている。その時、突然Bがどなる。

B 「うるせーぞ」

U 「ウルセゾウ」

B 「ばかー」

U 「ブガー」

女児たちは「きゃー」と、心得ていてうれしそうに逃げる真似をする。この時をどらえて担任「ねえ、先生は外にご用があるんだけど、あなたたち先生の代わりをしてくれないかな」

女児たち「いいわよ」と、目を輝かせて得意顔である。

担任「でもあなたたちが、この人たちの仕事をしちやいやよ。

わからないところがあつたら教えてあげてね」

女児たち「うん」

私は、戸外の子どもの自由あそびに参加し、時々それとなく室内をうかがうと、私などよりずっと親切に、なごやかに作業が行なわれていた。またBとUは、この頃実に気が合い、BはUによって一歩正常化にむかい、UもBによって日本語を少しずつ覚えもした。

実践例 二 九月十八日 自由あそび

室内で自由画や粘土をしていたA子、B、Uの方をそれとなく見ながら、少し離れたところで四、五人の男児たちが、ある子どもは大声で、ある子どもは声をややひそめて話している。

「あの子たち、ばかだね」

「へんなことばかり、いつてるもんね」

「せんせいじゃべつてるときでも、かってに、うたつてたんだぞ」

「かみしばいのときもあるいちゃってさ」

私は思わず、そのグループの方へ歩き始めた。とたんにサッと逃げようとする子ども、上目づかいに私の顔を見る子ども、無頓着な子どもら、各人各様である。

担任「ねえ、今の話もう一度聞かせて」と坐りこむと、こわい顔をしてただ首を横にふる者もいれば、黙って友だちの顔を見ている子どももいる。中で、悪びれない子どもが、

「あのね、あの子たちのこと、ばかっていったの。うちのおかあちゃんもいつてたよ」

皆の目は、もう私の爆弾が落ちるのを覚悟している。その目を見て、この時ばかりは私も、ぐっとこらえた。

担任「先生はそう思わないわ。Bちゃんは時々わからないことをするかも知れないけど、絵やお仕事はとてもじょうずよ。A子ちゃんはお話ばうまくできなくても優しいし、約束は一番よく守るし、スキップもじょうずですよ。Uちゃんは日本語はわからないけど、英語はおとなよりうまいのよ。それに三人は一度もおもらしをしたことがないわ（これは一言多かった）。そして先生が

一番えらいとは思うのは、三人ともとても心がきれいなのと、いっしょうけんめいに話した。皆、だんだんおだやかな顔になり、素直にうなずいた。私は彼らの目を見て、つくづく「本当に叱らなくて良かった」と思い、今でもあの時の男児たちのまじめな目の美しさを思い出す。

実践例 三 十月二日 お話玉手箱「アトリーの鐘」(童話)

をテープに吹込んだもので十五分間)

運動会の前後から、幼児は心身ともに急速な成長が遂げられる。テープに吹き込まれた童話を聞くことは、視覚からの補助の刺激がないため、ある子どもにとっては聞きとることに困難が伴う。私はこの日、A子、B、Uとあと二名の不適當と思われる子どもをつれて砂場へ出た。出る時に残る十九名の子もまたちに、信頼をもって話した。

担任「先生と五人のお友だちは、砂場に行こうと思うの。それで皆に頼みたいんだけどね、このお話をよく聞いて、どんなお話だったか、後で先生と五人のお友だちに聞かせて欲しいんだけど……」

子どもたち「いいよ。せんせい言ってきな」「よくきいどくから、いっていいよ」と、真顔で送りだしてくれる。私はテープをまわし始めると、すぐ五人をつれて砂場へ出た。だじ

ようぶとは思っても、やはり初めてのことで気が気ではなかったが、五人の子もたちは、この日ばかりは誰もいない砂場を独占して、のびのびとうれしそうだ。日本語がかなり上達したUだけは、

「センセー、ドシテ、ブグダチ(僕たち)ソトスルノ(外に出るの)?」と聞く。

「だってUちゃんたち、砂場好きでしょ」というと、単純に、「ウン」と納得して、遊び始める。

長いような短いような十五分が過ぎて部屋に帰ってみると、テープが終わって先生を呼びにしようとして、話し合っていたらしかった。私の顔を見ると一斉にしゃべり出す。皆の真剣な目と声の調子に、これは思わぬ収穫だったと、心から感謝の念が湧いてきた。後から手を洗って入ってきたBとUに、「ウルサーイ」と怒鳴られて、一旦静かになったが全員大笑い。砂場組の五人が席についたところで、

「それじゃ、ゆっくり初めから話して聞かせてね」と担任にいわれ、皆かわり合って話してくれる。先生の知らない、聞いていなかった話を、先生や友だちによくわかるように伝えたい。そのような子どもたちの気持が溢れていた。五人の子どもたちには、おそらく断片的にしかわからなかったと思うが、いきいきした子どもたちのふんい気に刺激され、自分たちも砂場でどんなことを

してきたかを、負けないくらい大きな声で話したのだった。

この経験によって、自分を積極的に表現しなかった子どもまでが、いきいきとその話し合いに参加したこと。思いがけない子どもが表現力に富んでいたりと、鋭い感受性をもっていたりして、全く驚くべき発見を担任としてさせられたものだった。

こうして各々の個性がはつきり出てきた二学期は、集団生活のいろいろな経験を重ねながら、幼児一人一人が自分以外の友だちにも心を配り、自然に仲間意識をもってA子、B、Uの足りないところも、全く自然な形で補い合う姿を見ることができるようになった。

※ 三学期

好むと好まざるとにかかわらず、あと正味二カ月半でこの子どもたちも小学校へ上がり、一組数十名の一員となる。いつものことながら、三学期は幼稚園生活の最後を充実させ、心ゆくまで楽しんでもらいたいと思う。しかし、ことにA子、Bのことを考えるところいろいろな気かりはあるが、最低これだけは身につけて卒業させたいと思う。(Uは三学期にはほとんど心配のない程度に日本語は上達した)

A子にはことに、他の幼児たちが親切でありがたいとは思っているが、そのために本人は困った時、自分で判断をしなければなら

ない時も、自分で訴えようとしなくて、友だちの働きかけに頼って待つ傾きが強い。

Bは随分よくなり、担任とも視線が合うようになり、自由あそびでは鬼ごっこ等、集団ゲームにも参加するようになったし(ただしルールは理解できなかったが)、多少は友だちにゆずることも会得し、表情も随分豊かになった。しかしまだ聞くべき話の最中に、好き勝手なことをしゃべり出したりひとり言をいいはじめる。

しかし、これらの「自分の考えや要求を行動や言葉で表現する」「相手の話を聞く時と自分が話す時のけじめをつける」などということは、A子、Bにかかわらず全ての幼児が身につけなければならぬことである。

実践例 四 一月から二月にかけて

私は組の幼児全員と話し合って約束をした。折紙や画用紙ひとつを配るにも、何を作るかを自分で決め、各自担任の所へ歩みよる。「○○をつくるから○○をください」といって、受け取る等々。

A子にとっては大変な努力を必要とすることであり、腰かけたまま泣き出した。担任や友だちに助けを求めていることは痛いほどわかる。私もそのような時、自分で自分がいやになり情なくて「いっそのこと、A子には特別に……」と、くじけそうになってしまう(とにかく泣いても、声が出なければ紙をもって担任

のところへ来て、スモックを引っぱってくれるだけでも、自分の意思を行動に表わして欲しい。しかし私は全員に向かって話しかけるのみにとどめ、

「ご用のある方は、先生のところまでちゃんとひとり歩いていらっしやいね」と、実に冷たかった。すると子どもたちの中から、

「はやくいきなさいよ」

「A子ちゃん、ちゃんどあるいてせんせんせいのごくにいきな」

「おやくそくだから、いかなきゃいけないよ」という、小さな声が聞こえた。何と優しい子どもたちだろう。この中のひとり、実践例二の中の男児のひとりである。A子も友だちに勇気づけられ、時間はかかったが何とかひとりやってきて、何とか要求をいい担任から紙を受け取り「心が強くなったのね」とほめられて、とてもうれしそうだった。

このようなことが幾度か繰り返され、家庭の協力も得て二月の中頃から、少しずつ（たどたどしくはあったが）要求が言葉で伝えられるようになり、急に口数を増してA子は成長した。

二月には楽しいお店ごっこをするために、組をあげて計画話し合せて、方法、準備、役割りを決める。幸い若い実習中の先生を得て、いっそう組じゅうに活気があふれる。

各グループに分かれて、いろいろなお店の準備が始まる。その

グループの中でも、それぞれ仕事の分担がきめられ、A子は最も人気のあるラーメン屋のおそばを、紙を細く切って作っている。どの子がA子の分担をきめたのか何とも心にくい配慮に、私は思わずそのグループの顔を眺めてしまった。Bは魚屋の看板を、大声をあげながら作っている。

春も間近い二月の末、室内から庭まではみ出している楽しいお店ごっこが、数日間くりひろげられた。（写真三）

こうしてその二週間後、A子もBもUも、先生方に一抹の不安を残して他の幼児たちと共に元気で巣立っていった。

※ 一年を通しあらためて幼児教育に思う

以上入園から卒業まで、四項の実践例をあげたが、いずれもちえおくれの幼児と普通児のかかわり合いのほんの一例である。私はいくまでも、現場のよき教師であろうと努力をしているだけの人間であって、幼児教育を高い次元で語ることはできないし、そのつもりもないが、保育歴十数年目にして、またこの貴重な一年間の経験により、今ひとつの想いに至った。

私が過去においておあずかりしてきたのは、普通児またはそれ以上の知能の高い幼児たちばかりである。これもひとつの幼稚園のあり方で、それはそれで良いのかも知れない。しかし人間の社会というものは、心身共にバランスのとれた人間ばかりではな

い。むしろ大なり小なりの欠陥をもった人間がほとんどもいえるのではなからうか。それを個性として認め合い、各人各様の生き方をしながら、本質的には共通性をもつ人間同士として、互いに支え合って生きていかなければならないのではないか。

ならば、当然人格形成に大切な時期であり、最初の集団生活の場である幼稚園で障害児をも受け容れることは、全ての幼児にとって理想的な環境づくりになるのではなからうか。

障害児を受け容れることは慈善幼稚園になることではない。彼らにとって理想的な教育は（広い意味の治療教育を含む）普通児の中に入れ、その子どもの能力よりやや高い環境や教材を与え、あきらめずに働きかけ育成を助けることだ。

普通児にとっては、障害のある友だちに対する考え方、態度、思いやりを毎日の生活の中で自然な形で身につけていく。また私も障害児を含む組を一年間担任したことによって、教師として実に多くのことを学んだ。というのは障害児を知ったことにより、普通児をより理解することができたことだ。これはたとえていえば、おとなを理解することは子どもをよく知ることに始まり、医師が人間の健康体を知らずして患者の病状を把握できないなどの、相関関係に似ている。

この一年間は暗中模索試みの一年で、未熟き故あちらへこちらへとぶつかりながら、決して満足のいくことばかりではなかつ

た。しかし障害児にとっても普通児にとっても、お互いにひとつ屋根の下で同じ幼児としての教育、しつけを受けたことはそれぞれがプラスであったに違いない。

「確かに理想的なことかも知れないが、実際にはいろいろと困難が伴う」との心ある園長先生、先生方のご意見が聞こえるようだ。だが、重症児はそれぞれ受容施設があるのに、ちよつとした配慮と個人指導をすることによって、のびる可能性のある中間児は行き場所がなく、家庭待機というのが現状である。幼稚園の対象となるのはこの中間児であつて、幼稚園もこのことについて真剣に考えなければならぬ時期に來ていると痛切に思う。小学校に特殊学級があるならば、幼稚園はたとえ義務教育でなくても、彼らを受け容れる体制ができてしかるべきだと思ふ。

ただ私には、今のところ特殊学級のように別個に障害児のみを集め、独立したクラスにした方がよいのか、普通児の中にひとり、ふたりと入れた方がよいのか、個々のケースにもよるだろうがよく分からない。それに何でもかまわず、すぐにでも障害児を受け容れることが望ましいとも思わない。

今すぐとはいかなくても、十分な準備（園の体制、職員的心構えなど）を整えた上で、“人間を大切にしよう”とする進歩的な幼稚園ならば、きつとそのような姿に変わっていくのではないかと、祈らずにはいられない。



保育雑評

守 永 英 子

有名な童話の中に、「はだかの王さま」という話がある。「王さまの着物が見えないのはバカ者だ」といわれると、皆、はだかの王さまをみても、着物が見えていような顔をするのである。

人間は弱い。大勢のあるところにつこうとするのは人情であろう。たとえ「王さまははだかだ」と心に思っても、公の場でそれを口にするには、大変に勇気がいることである。

公式の発言でなく、現場の片隅の自由な語らいの中に、本当のものを探そうとする心は、こんなところにある。

▼「最近、この地域では、やっと六領域のことを言わなくなりました」とは、ある私立幼稚園の園長先生の話。

研究会を開いて、地域の幼稚園の啓蒙に努力しているこの先生は、少しずつ努

力が実ってきたといったようであった。「六領域」の考え方が、いかに現場にとってマイナスになっているかを、言外に意味しているようである。

▼幼稚園教育指導書の一般篇が出たときの話——。「一般篇は大分よくなってきただけれど、いっそ「六領域」の考え方はよくなかったと、はっきり認めて、撤回した方がわかりやすいのに……」とは、ある保育理論担当の先生の言葉。

「六領域」についての批判はしばしば耳にするとところであるが、文部省の耳に達しているのだろうか。

▼「個人差に合わせた、きめの細かい指導をするには、一学級二十五人から三十人位におさえてほしい。一学級四十人以下などという設置基準をそのままにしておいて、指導書ばかりを書き直してみ

も、現場はよくならないのでは……」とは、現場の声。

▼指導書について——。「委員の名をたくさん連ねても、筋書は、二、三のきまつた顔ぶれで作つてあるようだ。新しい人からよい意見がでて、結局はとりあげられないし、十分意見を交して作りあげられるというものでもないで、あまり意味がない……」とは、経験豊かな先生の話。

「六領域」と同様、「指導書」についての批判も多い。「不適當な指導例があげられている」との声もある。せっかく文部省から出す指導書である。「一つの例に過ぎません」ではすまされまい。

▼「教育の問題」は「人（教師）」の問題に帰するのではないか。何よりも、よい教師を作ることが先決。……とは「問

題の子ども」に取りくみながら、横から教育界を眺めているある研究所員の感慨。

自由な場には自由な発言があり、自由な発言の中には、チクリとした真実がある。これを他の批判に終わらせず、これらの自由な発言の中から、「保育の問題」を掘りおこし、真実を探さねばならない。

川喜田二郎氏（「発想法」の著者）の次の言葉に、現場は大きな励しを見出すのではなからうか。

「現場の経験というものは久しいあいだ、学問をはじめとして理論的な関心のある人びとによってほとんど無視され、ときにはそのような経験を活用すること

が非学問的なこととして、軽蔑すらうけてきた。ところが、実はこの現場の経験なるものこそ、まさに新しいものを生み出す力の源泉だと断じなければならぬ。……（中略）……真の權威の源泉は現場の事実のなかにある。この点が今日、とくに徹底的に強調されねばならない。このような事実をふまえて、新しいものを生み出す第一歩をすることこそが、ほんとうに創造的であり、また生産的なことである。……」

保育者自身が己の足もとの事実の中に、保育の真実を探さなければならぬ。そう覚悟を決めねばならないときが、今来ているような気がしてならないのである。

人

フランシス・G・ウィックス夫人

幼年期の内的世界 (一)

秋山達子

フランシス・G・ウィックス夫人は、児童を対象とする数少ない精神分析関係の心理学者の中でも、特にC・G・ユングの教えの下に育った心理療法家の一人です。小学校専属の児童心理学者として出発し、多くの事例を扱ってきたウィックス夫人は後にユングに接する機会を持ち、ユング心理学の理論を基礎として九十余年の生涯を児童の心理療法の発展と向上に捧げられて、今から三年程前に亡くされました。

となを対象としたものもありますが、やはり彼女の真面目が躍如としているのは、一九二七年に初版が出版された「幼年期の内的世界」でありましょう。ウィックス夫人はこの本でとりあげた事例の中の多くの子どもたちについて、その後四十年以上もその成長を見守られ、彼女の九十歳の誕生日を記念してこれらの人たちの長い成長過程の記録を加えた改訂版を数年前に出されましたが、このような彼女の生涯をかけた研究は高く評価されてよいものと思います。

そしてこの本がそれほど古い昔に書かれたものであるにもかかわらず、今もなお新鮮な感動を読者に呼び起こし、私どもにも多く示唆するものを持っていることは、ウィックス夫人の実際に則した多くの経験とこれらに対する豊かな感受性と深い洞察とによるものでありましょう。

ウィックス夫人は一九二三年にチューリヒにユングを訪れ、それ以来ユングの指導の下に児童の無意識の問題について研究を深められました。この本はまたユングの

序文と共に出版されたことでも有名です。

これから三回にわたって、主としてこの『幼年期の内的世界』を中心にウィックス夫人の生涯をかけた努力とその成果の跡をたどってご紹介しようと思いますが、彼女の無意識の研究は、児童の社会への適応や不適応の理由には、意識的にははかり知れないものが多く、またなんとかして救いの手をさしのべようとする彼女の努力と熱意にもかかわらず、しばしばわけのわからない反抗に出合って、彼女自身の抑え難い感情からとり乱しかえって事態を悪くしてしまう結果を招くこともあるというような、臨床心理に携わるものが誰でも経験する苦い思い出から出発したものです。

なぜ楽しく気に話しつつづけていた子どもがある時点で突然話す力を奪われたように暗く押し黙ってしまうのであろうか。またなぜある年は元気でよく社会に適応しているように思っていた子どもが、その翌年には急に不適応を呈するのであろうか。子ども

が本来持って生まれた知性や感情はそれほど変化するものとは思われないが、これらの知性や感情はどこに消えてしまうのであろうか。またある子どもたちは家庭と学校とは違った態度を見せることがよくあるけれども、これはただ先生や両親による偏見や偏愛のためにのみ起こる問題であらうか。そして子どもとは一体どのような存在であらうか。

このような問題をかかえてウィックス夫人は、鋭い観察眼と暖かい愛情を持って、子どもの喜びを喜びとし、悲しみをそのまま受け入れながら、静かに用心深く子どもの心の中に入って行ったのです。そして幼年期の内的世界は幻想的でグロテスクで、時にはまったく意味もないと思われるようなさまざまな人格化された影のような姿で彩られ、その影のあやなす劇的な場面によって、子どもの人格形成が進められて行くことを発見したのです。このような子どもの内的な人格形成の過程をウィックス夫人

の言葉によって説明したいと思います。

人生の最初の正常な心理の発達は、基本的な人間関係の上に立つ安定感が重要な要素ですが、幼児の人格の形成の過程は決してやさしいものではない。子どもたちは常に多くの心理的な危機に見舞われ、しばしばあらわれてはまたいつとなく消える想像上の遊び友だちやお伽話の主人公に身を託してこれらの難問題の解決をはかります。

しかしこれらの幻想的な姿は、象徴的な仮面をつけていて、それほど簡単に見分けられるものではなく、ただ愛と共感と深い理解の下にのみ、真の姿をあらわすのです。抑圧された知識欲や愛情を求める心はしばしば怒りとなって表現され、また隠された不安や忘れられた経験、時にはずっと深いところにある集合無意識による不安は、恐れとなってあらわれ、悪夢や白昼夢や社会的な非行となって爆発します。このような無意識的な動機に対処するために、われわれは愛情と理解、そして直感的

な認識とまた無意識に対する技術的な知識が必要となるのですが、これらの知識は、学問的な理論や観念的な記録によっては得ることができないものであり、われわれは子どもたちから直接学ぶより他は獲得の方法もないのです。

子どもは非常に幼ない時代に内的な永遠の存在の経験を持つものですが、おとなになるにつれ外的な現実の問題に追われて、この経験は次第に忘れられて、意識の表面からは消え去ります。しかしこのような霊的な経験は心の深奥にとどまって、危機的な状態の時には再びどこからともなく出現します。われわれおとなは普段はこのような経験を忘れていたのですが、しばしば子どもたちと接する時に、再び思いを新たにすることができ、このような霊的な存在を感じることもできるのです。この霊的な存在こそ、ユングが深い洞察を持って感知し、そして彼を通して多くの人々に伝えられた人間の根源的な存在です。

このような洞察と発見の下にウィックス夫人は研究を続けられたのですが、その中でも児童の臨床的な心理学に対する最も大きな貢献は、子どもに与える両親の無意識的な影響についての研究であろうと思われまふ。次にこの問題についてウィックス夫人が扱われた事例に沿ってご説明することにしましよう。人格はもちろん感覚や反射や習慣などの外的な心理状況によって、その発展を促されるものですが、ウィックス夫人はここではこのような外的な理由にはあまり触れられずに、特に内的な理由を中心にとりあげています。

幼児の心理はほとんど無意識の状態にあつてその中で良い方向も悪い方向も共に可能性として持っているのです。そして最初はその状態から断片的な意識があらわれ、そのうちにこれらの断片は自我を中心として集まって、そこから人格形成が始まります。しかし子どもの自我はまだ深く無意識的なものと関連していて、その中に埋もれ

ているのです。子どもが肉体的にもまた経済的にも両親に依存しているものであることはよく知られています。子どもの無意識と両親のそれとの幼年期における連帯については、今まであまり考えられていなかったようです。しかしこれこそ、子どもの漠然とした不安や悪夢や時には社会的な非行にまで発展する大きな根拠となるものです。そして幼児は生理的には出生と共に母体からは独立をしますが、心理的な連帯はそのまま残って、ずっと後になって人格の形成が進むに従って次第に独立していきまふ。同じ家庭の同じ環境の下にあつても、子どもたちはそれぞれ違った特徴を持って育ちますが、しかし両親や家庭の無意識的な影響は子どもたちに大きく作用します。

例えば五十歳になる男性が以然として母親との同一視的な関係から抜け切れずに独立をした人格を形成し得ないで問題を起こすことがあります。これによつてもわかるように内的な世界における連帯感是非常

に強いものであるばかりでなく、また危険でさえもあります。

しかし同時にこの連帯感こそまた子どもの心理に安定感を与えて、恐れなく外的な世界と対決し、それを受け入れて行く基本となるものであり、子どもは感覚によって外的な世界と接し、直感によって内的な世界と結ばれて、その間で自我を育て人格を形成していくのです。幼年期の内的世界は集合無意識の強い影響による不思議な幻想とお伽の国の世界ですが、またおとなの意識的な善悪感をこえた非合理の世界であり、言葉や理屈は通らないところであり、ただわれわれのありのままの姿のみが子どもとの接触の究極的なよりどころとなります。どんな善行も恐れと抑圧の上に築かれたものであれば、それはただ子どもたちに不信感を与えるだけに終わってしまうでしょう。良いことでも悪いことでも、ただ自分自身をまず真剣に受け入れようとする態度のみが素直に子どもの心に受け入れられ

るものです。人生には難かしい問題がありますが、子どもの心理に影響するのは問題の存在そのものではなく、われわれの問題に対処する時の態度です。もちろん子どもにはおとなの間の複雑な問題を話す必要はありませんが、しかし両親が真剣にこのようなことに取り組んだ場合は、たとえばどのような結果となっても、子どもはそれを素直に受け入れることができるでしょう。

ここに父親と深い連帯感を持った九歳になる少女がいます。父親は強い神経症に悩まされて、仕事も手につかず、社会に対しても壁を作って引きこもりがちでした。それにつれて彼女も食欲がなくなり悪夢に悩まされるようになりましたが、ある晩彼女は有名な英雄の母親になっている夢を見ました。この英雄は闘志を失ってどうしても戦おうとしないのですが、彼女はその英雄を激まして共に楯をとって戦場におもむくところでした。もちろんこの夢は彼女自身の問題に関するものではなく、父親の状態

を示しているものです。しかしこのような場合に子どもに対して、それはあなたの父親の問題です、などと説明しても意味がないどころか、かえって父親との連帯感を強めてかえって悪い結果となりましょう。

この少女の場合は父親が自分の問題の解決の糸口を見出すと同時に彼女の悪夢もおさまって平静の状態に戻りましたが、このように両親と子どもの間には強い無意識的なつながりがあるのです。

またある少女はやはり悪夢に悩まされ、学校の授業中にも勉強に集中できず、突然不安の発作に襲われる症状を示していました。彼女が裕福な実業家の娘として生まれ、母親もまた子どもに愛情深く、また別に彼女についている若いお手伝いさんもしんぼう強くやさしい性格のようで、経済的にも家庭的にも恵まれていて一見何の問題もなく思われました。この母親は子どもの時に自分の父親との良い接触を持ち得なかったために、かえって父親的な支配的男性

に憧がれて結婚したのですが、これはかえって彼女の女性としての成長を阻む結果となり、彼はいつまでもただ支配的な男性としてとどまり、彼女は女性としての感情をすべて子どもに向けることになりました。

彼女はまたこの子どもの生まれる少し前に自分の兄の旧友とある程度の親交を保っていたのですが、支配的な夫はこれを嫌って彼女に裏切りものの罪悪感を抱かせることに成功しました。それ以来彼女は罪の意識から犠牲的な気持で、ますます子どものためにのみ生きることになりました。このようにこの少女は一方では支配的な父親の強圧的な愛情の下にひきずりこまれ、また一方では母親の自分勝手な罪の償いの対象とされて、経済的にも愛情面でも決して不足してはいないにもかかわらず神経症的な症状を示すようになったのです。

家庭内には真の愛情がなく、両親は共に真の人格を持たず、ただ支配的な父親と犠牲的な母親という昔からの類型に生きる人

たちの間で、彼女は幼年期の人格形成に必要な両親との真の連帯感による安定した人間関係を持たずに育ってしまったのです。

夫婦間に愛情や理解が欠けている場合もしばしば子どもの心理に破壊的な影響を与えることがあります。このような場合は、子どもはよく発作的な愛情のための対象や両親の一方による愛情不足の代償に使われるのですが、それは愛情ではあっても両親の自己満足のためのものであり、現実には生産的な愛情とはなり得ないのです。もしわれわれが子どもの人格それ自体に直接根ざしたものではないものと関係を持つとすれば、それはただ子どもの心を傷つける結果に終わるだけです。母親の未発達な情緒面の犠牲となっていた息子が代表して女性との正常な関係を保ち得なくなる例はよく見られることです。

また不幸な結婚の結果としての事例。ある少年はわがままで嘘つきで、粗暴であるという理由で相談所に送られてきました

が、問題はただ彼自身にのみあるのではないことがすぐに察せられ、母親は第一回の面接の時から正直に、この子どもに対して小さい時から理由のない嫌悪感を抱いていることを告白しました。もちろん彼女はこれを態度に出さないように努め、母親としてするだけのことはしてきたのですが、ただ自分の息子の傍にいても嫌に感じられる時もあり、子どもの方はこのままの状態では信頼感や内的な洞察を持ち得ないであろうことは明白でしたので、まず母親の問題からとりかかるところにしました。

この少年の両親はまだ非常に若いうちに婚約したのですが、男性の方は長い婚約中に他に本当に愛する人ができてしまいました。彼女が婚約を破棄することを拒否しました。彼女は他の人の幸福を破壊する愛は真の愛ではないという考えを抑えて、「そのくらいの実は許してやってもよいほど自分は彼を愛している」ということで自分自身を納得させようとした。しかしな

がら自分が本当に愛されてはいないことは心のどこかでよく知っていましたから、なんとか男性の気持を惹きつけておこうとして、無意識的なヒステリーによる虚弱をよそおうことになりました。そこで彼は彼女の健康を気づかうあまりに、まったく彼女のいいなりとなり、献身的に彼女のために尽すようになりましたが、彼女はやはり自分は本当は愛されていないのだという不安感から逃れることはできませんでした。

この少年は大変に父親に似て育ち、彼女は自分の子どもの上にかつて自分を裏切った男性の姿を見ることになってしまったのです。意識的には裏切った男性である夫を許し、すべてを許したつもり彼女の彼女も、無意識の中ではかつて起こった事実が忘れられなかったのです。父親は自分の失意を忘れるために仕事に没頭し、成功して家庭を豊かにすることで、自分の不満を含めた不実の代償をしようとしてました。

彼は若い時にある牧師から、名誉のため

に自分を犠牲にすることが最も尊いことであると教わったのですが、彼は約束を守る名誉のために彼自身を犠牲にしたのみならず、彼を真に愛した女性を犠牲にし、幼稚な権力欲と子どもっぽい依存の状態にあるわがままな女性を助けるために彼の生涯を捧げることになってしまったのです。

弱きものを助けることは、そのものがいささかでも強さを増す時にのみ意味のあることですが、その反対に強きものも傷つけてしまうような時にはこのような美しい心もただ精神の死を招く結果となるだけです。また彼にとって意識的には家庭の幸福のためによく働くという行為も、無意識的には現実からの逃避でしかなかったのです。この少年はその結果として物質的な欲望のみを発達させ、母親の無意識的な敵意を友だちに投げかけて粗暴な行為となり、また父親のごまかしの生活から嘘言を学びとったのでした。この少年は母親の内的な心理状態が改善されると同時に良い方向に

向かいましたが、このように子どもは両親の無意識的な問題をそのまま受けついで情緒不安定となったり、また一方では社会的な非行へと走るようになるのです。

子どもの人格形成はこのように両親との間の安定した信頼感と人間関係の上に芽ばえるものですが、最終的には子ども自身の個人としての独立を目的とするものです。フランスス・G・ウィックス夫人はこの問題の結論として、子どもはわれわれが将来の道を開いてやるとやらなくにかかわらず、自分自身の道を求めて成長するものがあり、より大きく考えれば、われわれは結局子どもを将来を選んでやることはできないのであって、ただわれわれ自身の道を清めて、そこから子どもが彼自身の生涯を歩むためによりよい展望を持ち得るようにしてやるだけである。子どもの問題に悩む両親はまず自分の問題を素直に認めてその解決に真剣にあたるのが第一であろうと忠告しています。

「かえるのエルタ」

中川李枝子作

鈴木直美

今月から新しくこの欄がはじまり、その第一回をこうして書かせていただいたける光栄といえはあまりに光栄な、でも私にとってとはとても困った事態になって……本当に困っています。きつとこれから

は、りっぱな先生方が良い書評を書いてくださるでしょうから、今月号は、新しいこの欄を紹介させていただく気楽なブローグとして読んでいただきたいと思います。

その前に、このたいへん困ってベンをとった私ですが、私は、昨年四月に幼稚園に「入園」したばかりのシンマイ先生です。

同じく四月に入園した三年保育の子どもたちといっしょに、新しいことにひとつひとつ驚いたり感激したりしながら、

あわただしくも楽しい毎日を過ごしています。おかげで、わが子たちはこのつたない先生をまるで恋人のように慕ってくれ、幼稚園が楽しくてしかたがない満足気な顔で遊んでいてくれます。

一方では、日々のいくつかずつのつまづきを「あーあ」とためいきまじりに悔い、もっともっと勉強しなくては、と思いながらも、毎日毎日子どもたちと走ったり暴れたりしてあんまり本などは読まない不勉強な私……。

元来、絵本、童話、マンガ、小説は人並みの読書をしてきても、それ以上は卒論の時に「しかたなく」読んだむずかしい本がいくつかあるくらいの本当に不勉強者なのです。（こんな自慢するように強調するのではなく、小さくなって反省しなくてはいけないことでしょうね）

「幼児の教育」ですら毎月一冊ずつこ
なすのがたいへんな私が、こんな欄を書
くなんて、どうも編集の誤りのような気
がしてなりません。

前置きが長すぎてしまいました。さ
てこんな私ですので、ここで書かせてい
ただきたいのは、やさしい楽しいすてき
なお話、中川李枝子さんの「かえるのエ
ルタ」という童話です。「ぐりとぐら」
や「いやいやえん」等々、中川李枝子さ
んの数々のお話は、ほんとうに子どもら
しい楽しさがあふれていて、私が大好き
な本ばかりです。その中のひとつの「か
えるのエルタ」は何も私がここで書かず
とも読んでいただければわかるし、もう
すでにお読みになった方も多いと思いま
す。

かんたくんが拾ったかえるのエルタが
同じかえるのドレミちゃんと結婚式をあ
げるまでのお話ですね。その過程のひと
つひとつの会話が何ともいえず子どもら
しくてかわいくて、お話の展開の飛躍が
アツと思う楽しさ……かえるのエルタ
が、はじめはおもちゃだったのに突然歌
をうたい出し、かんたくんをその名も愉
快な「うたえみどりのしま」に連れてい
ってくれるお話です。

途中でおとなりのくみこちゃんやら、
くみこちゃんのお友だちだった、まるで
そこいらにいる女の子のようなかえるの
ドレミちゃん、指輪を三つもはめたかえ
るの王さま、トランプが大好きで、すぐ
「食べちゃうぞお」と驚かすけれどとて
もやさしいライオンの「らいおんみど
り」くん……子どもってこんなふうに住

分の世界を広げていくのだろうな、とわ
かり、お話の世界なのに不思議と現実く
さくて、おとなでも抵抗なく楽しめま
す。

子どもは限らない夢を持っているし、
大きな可能性をあふれさせているのです
もの、それをおとなが決して阻んではい
けないと思います。保育者として子ども
といっしょに夢を育てたいし、より広
く、よりのびやかな心を持っていきたい
から、そんな私にこの童話の世界がとて
も大切に思えます。子どもに接するもの
として、子どもが楽しめる本を同じよう
に楽しめる心をいつまでも持っていたい
私の愛読書、ご紹介というより、勝手に
小さなつづきを書かせていただきまし
た。

津 守 真

一月号より、新たな編集委員会により、この雑誌の編集を行なうことになりました。

幼稚園長の周郷博先生（同じ編集委員でありながら、先生をつけるのはおかしいようですが、私が書いていますので、先生をつけます）をはじめ、幼稚園の先生方が交代で編集委員に加わってくださいるので、これから、この雑誌も本格的におもしろくなると思います。また、児童学科助教授で、

幼児保育講座を担当し、児童文化に通じておられる本田和子先生が編集に加わってくださいるので、新鮮な風が吹きこむような思いがします。寺井直子さんは、この数年間、

お茶の水女子大学の研究生として研究しながら、この雑誌の原稿依頼、わりつけ、校正などの最も重要な縁の下の力もちの役を果たしてこられました。

もともと、この雑誌は、お茶の水女子大学（元東京女子高等師範学校）の雑誌として始まり、これまで長い間、大学の雑誌として続いてきましたので、今後も、大学

で編集する雑誌としての性格を貫いてゆきます。

印刷、販売などの業務は、従来長くフレール館のお世話になっており、その支援がなかったら、この雑誌の発行も困難だったろうと思います。今後も、いままでと同様に、お世話いただけるだろうと思っております。

そして、何よりも、この雑誌に書いてくださる著者の方々がこの雑誌の中心の力です。これからも、本当の幼児教育をさぐり求めてゆかために、よろしくご協力をおねがいいたします。また、幼児のことを第一に思っ現場や研究の場で働かれる読者の皆さんが推進力です。どうぞいろいろとご意見を寄せてください。

なお、当分の間、編集の最終責任は、従来通り、私が負うこととなります。繁忙な校務、研究のかたわらの仕事でありますので、手落ちやあやまちもあり、十分に責を果たしえないことをおそれています。ただ、この時期にあたって、幼児のための幼児教育が確立するのに役立つならばという思いのみです。

昭和四十五年十二月二十五日印刷
昭和四十六年一月一日発行

幼児の教育 第七十巻 第一号

一月号 © 定価八〇円

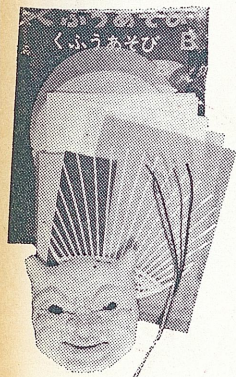
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

印刷所 凸版印刷株式会社

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

ことしは こんな新製品が登場します。



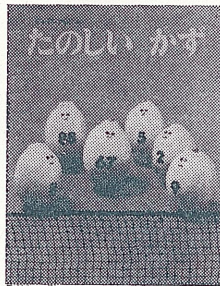
くふうあそび®

素材ばかりを用意した作品集です。材質を生かして自由に楽しめるよう豪華にセットしてあります。



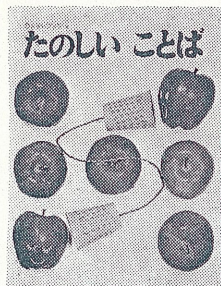
せんのリズム

初歩的な線を楽しむリズムカルに描くことによって描画や字を書くことの基礎となるものです。



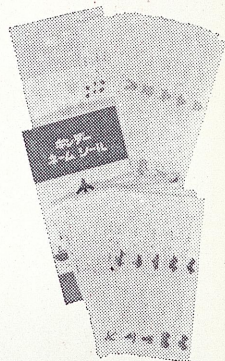
たのしいかず

カレンダー、時計など身近かなものをテーマにした遊びの中で、数と順序や集積などの関係を知らせます。



たのしいことば

楽しくパズル遊びやしりとり遊びを通して文字と言葉、言葉と言葉の関係を、知らせます。



キンダーネームシール

のりも、水もつけずに、そのまま台紙からはがして使えます。戸棚や持ち物に貼ったり、また模様遊びにも利用できます。各シリーズとも10種類で黄・赤・青・緑・桃の5色2組の100枚セットです。組・名前を書く欄があります。のりもの、どうぶつ、さかな・かい、くだもの・やさしい、はな・むし、いろいろなかたちなどがあります。



たのしいおもいで

子どもたちの園生活時代の作品を破損しないようタトウ式にしてあります。A3判が収められます。

このほか、いろいろな新学期用品を取り揃えております。ご用命は、代理店・支社・支店・出張所へどうぞ。

新しい感覚と豊かな内容で定評がある

フレーベル館 46年度 **新学期用品**

発売
フレーベル館

4月号からは、いつそう充実した内容になります。

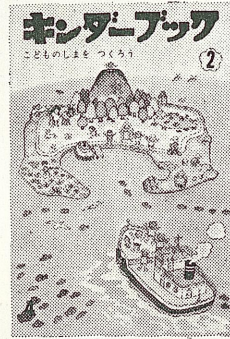
増頁断行で



キンダーブック①は、幼児に身近かな事柄をテーマに、観察的な要素を十分にふまえながら幼児の情操を豊かにほぐし、創造性を育てていく伝統ある保育絵本です。

4月号では、春の牧場に遊ぶ子羊と雲が展開する幻想的で美しく楽しい物語り、幼児はもとよりお母さま方にも拍手をもって迎えらるる絵本です。

4月号① ももこくんのおともだち A4判 20頁 多色刷
つばめのおうち・工作付録つき
定価1100円 団体購読価1000円



キンダーブック②は、幼児の科学に対する興味やあこがれを正しく伸ばし、育てるように配慮された、楽しい観察絵本です。

4月号では、現代社会に欠けている自然に子どもを返すべく、幼児たちが力を合わせて自然を再生させていく姿を描き出します。アフリカの動物図鑑とともに絵本の中の自然を充分お楽しみください。

4月号② こどものしまをつくらう A4判 36頁 多色刷
つばめのおうち・工作付録つき
定価1400円 団体購読価1300円



民話は、名もない1人1人の庶民のこころの中から、いつとはなしに生まれ、語りつがれてきた民族の遺産です。本誌4月号では、入園進級した園児のために日本の民話をとりあげました。1人のきこりの若者と、別名春告鳥と呼ばれるうぐいすとの、とある山里でのふしぎなできごとを描いたおはなしです。

4月号④ うぐいすのさと 文・後藤根根 絵・黒崎義介 判 36頁 多色刷
つばめのおうちつき 定価1400円 団体購読価1300円



子どもたちの周辺に存在するあらゆる問題を、新しい角度から取材し、より核心に触れた材料を、お母さま、先生がたへおとだけします。4月号からは増ページして、特集記事を満載いたします。毎日のお弁当のおかず、簡単に作れる美しい刺しゅう等カラーページを駆使してより充実した内容で登場いたします。

4月号④ し判 40頁 多色刷
手芸紙付録つき 定価1100円 団体購読価1000円

フレーベル館の
4大月刊保育誌を推薦します。

評論家 大宅壮一 茶道家 榎千家 塩月弥栄子 生け花家 安達瞳子 評論家 楠本憲吉 音楽家 石井好子
東京・ちぐさ幼稚園園長 山口猪祐 東京・港区立弁幼幼稚園園長 湯浅晃一 東京家政大学教授 山下俊郎

発売
フレーベル館